

続・幕末の洋学事情

——近代の発信地、長崎と蘭医と近代教育——

杉 本 つ と む

(1)

佐賀藩と英学

近代の発信地である長崎と、近代的西洋教育を取り入れた佐嘉（賀）藩の場合を考えてみよう。これは明治維新で重要な役割を信じたフルベッキと佐嘉藩の致遠館、大隈重信などとも、ふかいかわりがあることになる。

佐嘉藩自体が近代を急速に志向できたのはその地理的位置や藩主、鍋島閑叟の英明さ、さらに藩士に秀れた人材を得たことによる。

私見では佐嘉藩の近代への志向の直接的第一要因は万延元年の出来事にあると思う。すなわち、万延元年（一八六〇）二月に遣米の使節が、同年五月に帰国したが、使節一行に佐嘉藩からも五名が参加したのである。すなわち護衛の咸臨丸に、藩の蘭学寮——安政三年（一八五六）に設立、のち、致遠館の設立にもつながる——の生徒、秀島藤之助、福谷隆志の二名が参加、彼らは、へ長崎海軍伝習所へで訓練を受け、蒸気・砲術・窮理・算術の四科を兼ね、深才敏思の

人物であつた。後者は精鍊方出身で、理科機器の操作に巧みな技師であつた。サンフランシスコ港に到着のとき、アメリカの祝砲に対して、答礼砲を放とうとしたとき、勝海舟——船に弱く、航海中は室外に出るを得なかつた、船酔で使い物にならなかつた——が仕損じを心配して中止を命じたが、秀島の沈着精密な行動により、無事済ませたというエピソードが語られている(勝はうまく打てたら首をやると約束したそうである)。秀島、福谷はアメリカの船工の働き具合を注視し、しばしば質問もして大いに学ぶところがあつたという。しかし、そこで蘭語が通ぜず、英語で通訳できるのは中浜万次郎のみなので、いそぎ英語の稽古をすることとなつた。^{*1}一方また、使節に随行の本島、島内、小出の三名はワシントンでアメリカの新文明事業の盛んなのに驚嘆——鉄板も木板のように切断するのに茫然自失したなど伝える——、蘭学寮で歴史・地理・紀行などの諸書により世界に関する予備知識を学んでいたのが有効であつた。アメリカではそれら学習を实地に对照して、政治・経済・法律などの施設も視察した。帰途インド洋を通過したのであるが、イギリスやフランスの植民地政策を眼前にして、へ弱小国の蘭語よりも英語を学び、世界の知識を得んと痛感したという。いうまでもなく、佐嘉藩のみでなく、参加の使節団のメンバーも多くがアメリカの民主主義に大きな衝撃を受けたと注記している。^{*2}

藩士三名の復命に耳を傾けた藩主、閑叟は翌文久元年三月、秀島藤之助、中牟田倉之助、石丸虎五郎三名に英語稽古を命じ、通詞の三島末太郎に就いて学習させた。おそらく、長崎に滞留のアメリカ人宣教師や長崎奉行の設置した英語伝習所などでも学習したのではないかと思う。そして英語学習のため、つぎの英語学習書などを購入している。

Van der Pijl: Gemeenzame Leerwijs, voor deezenen, die de Engelsche taal beginnen te leeren, Dordrecht, 1822(2版)
Hooiberg, T.: Volledig zak-woordenboek voor de Engelsche en Nederduitsche talen, Dordrecht, 1845

桂川甫周編『和蘭字彙』（安政二年・一八五五―同五年・一八五八刊）

最初のファン・デル・ペイルの著書は、既に安政四年（一八五七）長崎西役所で復刻本が出版されている。また江戸の開成所でも、このファン・デル・ペイルの著書により『Familiar Method』（一部。万延元年刊）『英吉利単語篇／Vocabulary』（慶応二年刊）などを出版し、民間でも『咲蘭対訳（単語・文法・会話篇に分かれる）』（書店、須原屋伊八刊。単語・会話篇）や『英吉利会話』（ガラタマ校閲・渡部温訳編、慶応三年刊）などが刊行されている。実際の出版部数は判明しないが、幕末まではきわめて必要度の高い書物で、拙著で考察したように、幕末、英語学習上、利用度第一のものであったと思われる。なお余談ながら、秀島は藩からの課題を鋭意遂行し、へ遠境絶域の航海国初以来比類なき義と役米五石を下賜されたという。佐嘉藩の英学はこのように、他藩を圧していたといってもよい。大隈八太郎（重信）もこうした中にそだったのである。

さらに、随行の一人、小出千之助は蘭学寮の教師としてこの体験談を生徒たちに話し、英学をすすめた。同僚の大隈は小出から個人的にも体験談を細大もらず聴きとり、いよいよ英学の必要性を胸に秘め、さらに西洋の政治・経済に眼を注ぐことを決意——万延元年という年は佐嘉藩にとっても英学が盛んになる大きなきっかけとなった年である。なお、長崎海軍伝習所には、佐嘉藩として秀島をはじめ、十名が伝習に参加しており、カッテンディーケとの交流をふかめたことがしられている。^{*(1)}その学習操練の技術が認められて、遣米使節に参加できたわけである。また、閑叟自身、蘭医、ボードウインに診察してもらっており、出島の甲比丹やグラバ商会にも招待され、フルベッキとも歓談している。佐嘉藩の進歩性は藩主自身の行動にかかわっているのである。その結果、佐嘉藩は文久元年に三重津に海軍所を創設、軍備において佐賀藩の近代化を推進することとなった。ここで日本最初の小型蒸気船、浚風丸が建造された。この海軍所建設がまたきっかけとなり、佐嘉藩で購入の観光丸を幕府に納め、さらに、佐嘉藩の技術により

作製した蒸気罐を上納し、幕府側の責任者、勝との交渉の結果、のちには「横須賀造船所」の建設ということにも、その技術や方法が活用された。

いうまでもなく、佐嘉藩は幕末には蘭学の重要性を認識し、安政三年（一八五六）に「蘭学寮」を設立したわけであるが、緒方洪庵とも親交のある大庭雪斎は、蘭文典『訳和蘭文語』（和蘭文語凡例）を訳編しているほどに、蘭学寮での蘭語学習の実情が推測できる。大隈重信は「わが教育観と洋学研究」の中で、「蘭書によって、地理、兵制、物理等西洋の実用的な学問を修めたが、たとえこれが簡単な書物であったとしても、その当時では、知識を啓発した功績は本当に少なくなかった。これによって始めて欧米諸国の貧富、強弱、土地の肥瘠、物産の豊乏、並びに制度、文物等の一般を知ることが出来た。そうして当時最も強くわたしの頭脳を刺激したのは、オランダの建国法であった」とのべている。英語学習の基礎に蘭語があり、さらに英語によって、西洋の近代国家の内容がみえてきたことは決定的といえるのである。大隈は「大層苦心して」このオランダの建国法を読破したのであった。彼は文久元年（一八六一）、藩主、鍋島閑叟が蘭学寮に臨んだとき、オランダ憲法の一部を講じてお褒めのことばを頂戴したという。とまれ大隈の語学の基礎もまずオランダ語であった点は十分に認識しておかねばならない。さらに大隈はウィリアムズ、フルベッキ等に英書の質問をしてその論をきいたとのべ、「少年の好奇心から、勉強のかたわら、キリスト教のことをも研究しようと思ひ立った」のである。当時、藩内のうわさでは副島と大隈は魂も腐つて、「専ら邪宗引入れをしている」とまでいわれたと大隈はのべている。これは反面、大隈がいかに熱心に英語やその精神的財産ともいふべきキリスト教の理念、バイブルの講読に努力したかを物語るものであろう。のち、フルベッキを開成学校に招聘するとき、「フルベッキから学びとったキリスト教の知識は、その時（耶蘇教を認めるか否かの問題がおこったときのこと）のわたしに大いに利益を与えた」とものべる。

致遠館の史上に占める位置はかなり重要なので、すこしく紹介しておく。

致遠館は慶応元年（一八六五）に設立されたが、大隈ののべるところではこれには藩の蘭学寮の学生の間で、時勢を見、長崎で直接外国人から、〈詳しく西洋の文物制度を研究しよう〉という意志の働いたのがきっかけという。藩内には不可の意見もあつたが藩主の英断で、三十余人が選抜されて新設の致遠館で英語を専心勉強することとなつたといふのである。しかし同じく大隈がのべているように、〈時勢の進展〉を見、藩としても、西洋の新知識の一日も速い輸入が必要と考え、蘭学寮の学生から若干を選び長崎へ派遣して外国人から外国の文物制度を研究せしめんという考えがあつたからである。これにはまた、〈外人の長所は単に器械や兵制のみでないことがわかつた〉という大隈らの勉学の成果もあり、さらに、先にふれたところであるが、遣米使節の一行に随行した藩士の帰国体験談が決定的影響を与えたことである。

本来、蘭語学習のより直接的動機は、〈大砲術・築城術〉など、幕末緊急の戦時体制にそなえるための兵学にあつたことも自明である。これはまたとりもなおさず、久米邦武が回顧しているように、幕末騒乱のおりとて、長崎で諸藩は、〈兵器買入の熱に侵されて、長崎に集り、長崎が国事の策源地〉であり、〈長崎の状態は大変化で、英語が蘭語に代り、私貿易が会所を圧倒し、長崎は志士の策源地になつて青年書生密商者は幕吏公商の利を奪へる有様〉という、歴史的舞台に化したといえそうである。藩主、閑叟は〈火器の進歩に遅れじと常に長崎輸入の火器に注目して居た〉という。そこに理財の才にも富んだ大隈は蘭学寮の教職にありながら〈折々長崎に往来し、英米の商人とも往来し暗中に飛躍していた〉のである。佐賀の巨商、弥富元右衛門、水町寿兵衛などと機にふれて懇親を通じ商事を相談したという。長崎会所での交易も私貿易に变じ、蘭学が英学に改まり、佐嘉藩士の中に、新知識人が輩出、先にあげた石

丸虎五郎、馬渡八郎、本野周藏などは英語に巧みとなり、通詞を介さず外国人と自由に交渉することができるようになった。石丸はやくフルベッキと交渉をもった。また、大隈らと交渉をもった英商人グラバは僅小の資で来崎し、銃砲器などの注文で巨万の富をなしたわけである。

こうした時勢を背景として、大隈は畏友の副島種臣（大隈より十歳ほど年長）や小山などとはかつて、誠実真摯の声聞のよいアメリカ人宣教師、フルベッキを招聘することになったのである。これには彼がオランダ生まれであり、オランダ語、独語、英語によく通ずるので、英語の指導者に選んだのである。加えて欧米の事情など、宣教師の地位から、そのネットワークを利用してえられる多くの情報を期待したわけである。はじめ長崎の五島町の深堀邸に教場寄宿舎を設け、そこにフルベッキを聘して英学を講じてもらった。

いうまでもなく、佐嘉藩の藩校、弘道館も時代を反映して保守と進歩の二つの勢力に分かれてきた。後者は、すでに上でもふれたように、来崎のアメリカ人宣教師によって中国からもたらされた多くの漢訳の欧米科学書により近代の新知識を獲得することができるようになったのである。さらに、先にあげた遣米使節に随行の帰国談にも触発され、佐嘉藩の伝統的漢学グループはその進歩派が「英学」へと急速に接近もしていく。まして蘭学寮の書生たちは、長崎で英学を学ぼうと強い希望をもち、蘭英兼修の熱はますますばかりであった。

さて、致遠館が長崎に設立されたころは長崎がもつとも繁栄したときであった。大隈はこのべている。

各藩の人々の往復が盛んであるのみならず、外人との交際もまた大変便利であった。故に長崎は京都について全国の有志の集合場所となった。……当時は已に毎月一回欧州からの便船もあったから、その便りによって欧米各国の事情や世界の大勢をも略々聞き知ることが出来た（『大隈伯昔日譚』）

こうした状況下で大隈はフルベッキにあり、ヨーロッパ学を学び、キリスト教を理解し、いよいよ英語学習をも進

歩させたのである。これはそのまま佐嘉藩の近代化につながる。

フルベッキはまた、大隈らと知りあう前に、先にあげた佐嘉藩の石丸虎五郎らと接して、個人的にも英語を教授していたようである。おそらく藩からの派遣で石丸はフルベッキに師事していたと思うが、石丸の案内で、文久二年八月に当時のイギリス領事助手のフレッチャーとフルベッキが佐賀に来遊した。かねて佐賀が学校教育が盛んであるのを見たいという希望からであった。そこでフルベッキは藩校、弘道館を見学、また、蘭学寮の俊才十名と接觸し、交遊を交えたが、このときにフルベッキを「米国の聖人なり」とその人格高潔、篤行に推服したという（『久米博士九十年回顧録』へ長崎に致遠館の建設）。おそらく大隈もこのグループの中にいたであろう。佐嘉藩にはかなりはやくから英語に巧みな藩士が出ているのも、万延元年の遣米使節に随行したことのみでなく、むしろ佐嘉藩の有志ははやくから来崎のウイリアムズなどに接し、また、長崎に幕府の設置した長崎伝習所などと関係をもつて英語を学習したのではあるまいかと思う（後述参照）。

いずれにせよ、佐嘉藩とフルベッキの関係はまず、英語学習の必要性をとおして接近したのだと思うが、大隈の語る英語の効用と致遠館などについて、彼の回顧録の一部をつぎに引用してみよう。

わたし達もいよいよ英学の味がわかるようになるにつれ、ますますその有益さを感じた。それが記している処は、広く且つ深く、非常に實際的で、殆ど人類がしなければならない事を余すことなく記している。即ち歴史上、社会上、法律上、経済上の事は勿論、兵制、戦術、通商、貿易、航海、築造その他もろもろの工芸にいたるまで、凡て学理を以て整然とした定めをしないものはない。そこでわたし達は始めていまままでゆるがせにして来たものが、反って人類について実に大きな関係を持つてることがわかり、これこそ活学だと思ったのである。

わたし達はこの訳を知ると同時に、わが国の今の教育に対して益々遺憾とする心が沸き起って来た。そして「漢

学は凡て空理空論を第一とするもので、勿論活動的な社会の人間を養成するに足りない。これを養成するに足りないばかりではなく、反つて有為の人物を無用の人に変えてしまうものである。ご覧なさい。現に儒者と云われる人が、人類社会にどんな地位を占めているだろうか。彼らは一種の生き字引で、ただ消化し切れない文学を胸中に貯え、常に誤った夢を見るにすぎない。政治上、社会上、実業上でいささかの利益を現すことなく、また一つを計画しても、その目的を、方法を考え出すこともなく、ただ出まかせの言葉を並べて自ら足れりとするのみである。その言葉や方針は人生処世の大道を少しも指すに足りないものである。故に目下の急務は、将来何を仕出すかも知れない青年に対しては、漢学を止めて英学を学ばしめることである。片寄り勝ちで頑くかな思想を打ち碎き、天は高きもの、地は厚きものとの真の姿を知らしめることである。彼らがこの途によつて少しでも進むなら、わが国の将来は兵事にせよ、政治にせよ、教育にせよ、更にまた商工業にせよ、必ずよく改革の効果を収めることが出来るのである、と思つた（『大隈伯昔日譚』）。

かくして、大隈らはへそこでわたし達は先に長崎に設立した致遠館と云う英学校の仕組を拡張し、佐賀藩の師弟は勿論のこと、他藩の有志をも集めて相共に同窓の交わりをさせ、将来同一の方針によつて改革の要にさせようと考え（同上）たわけである。これはそのまま、明治維新の新しい教育制度の導入にあたり、鍋島閑叟の断行せんとした考えとも共通する。この致遠館には、大隈らのもくろんだごとく、高杉晋作、坂本竜馬、木戸孝允、伊藤博文、井上馨、小松帶刀、西郷隆盛兄弟も集まり、致遠館を舞台にして、フルベッキに接觸することになるのである。

大隈がのべるまでもなく、これまで考察したとおり、幕末の長崎はまさしく全国の知識人、文化人、政治家、憂国の士——いずれも藩での上層部であり、実力者たち——そうした国を動かすものたちが集會し、接觸することとなるのである。長崎は近代の情報発信地であり、近代思想の震源地としてその地位は独特のものが形勢されつつあった。

そのど真中に致遠館が設立されたのである。

(2)

フルベッキ 幕末の教育機関を一見して、長崎の英語伝習所、長崎海軍伝習所・同医学伝習所（養生所・医学所）、きと近代教育 らに佐嘉藩、致遠館について考えてきた。^{*4}しかし長崎にはその伝統と風土性から、さらに決定的ともいえる一事がある。すなわち、新しい要素、キリスト教伝道のために、外国人宣教師がやってきたことである。上でふれたフルベッキはその一人であるが、いうまでもなく、彼らは日本の開国を今か今かと手ぐすねひいて待ちうけていた人たちであった。何よりも異教徒に神の福音を伝えるためである。

もっとも活躍したのはアメリカ人宣教師たちといえる。すなわち、安政六年（一八五九）五月宣教師J・リギンスLigginsが、翌、六月にC・M・ウィリアムズWilliamsが、さらに十一月に、G・H・F・フルベッキVerbeckが長崎にやって来た。フルベッキはJ・C・ヘボンHepburnやS・R・ブラウンBrownと同僚であった（ヘボン、ブラウンは横浜へ行く）。また、『長崎海軍伝習所の日々』^{*5}には、安政六年（一八五九）にアメリカ宣教師マクゴワンなる人物が登場している。彼については古賀十二郎氏は、マ氏は中国名、瑪高温といい、唐通事五、六名に英語を教えたと紹介している。具体的には唐大通事、鄭幹輔を取りあげて、鄭氏が同僚六人——游龍彦三郎、彭城大次郎、太田源三郎、何礼之助、平井義十郎、もう一名——とともに長崎に滞留中のアメリカ船に赴き、マックゴワン氏に就いて英語を学んだという。マ氏は唐通事たちが熱心で英語の発音もよく、進歩が著しかったと感嘆したとも紹介しているが、長崎滞留はごく短い間だったようである。

以上のように、アメリカ人宣教師が唐通事に英語を教えたことは、長崎での英語学習熱や普及に一つの大きな刺戟

を与えたことが推量できる。中でもリギンスやウィリアムズが大きな役割を演じたようである。

長崎のアメリカ人宣教師に共通することは——当然のことではあるが——熱心に日本語を学習し、同時に中国で中国語を十分に学んだ成果をこれに十二分に活用していることであろう。

リギンスは長崎奉行の要請で長崎通詞に約半年、毎週月・水・金の三日間、英語を教えている。これはおそらく、英語が緊急のものとなったための特別教育であろう。宣教師は同時に中国から持参したり、取寄せた漢訳の聖書や科挙書を日本の知識階級に売却したり与えている。そして、日本語学習のために、長崎の漢方医、笠戸順節と深い交際をもったという。リギンスは『Familiar Phrases in English and Romanized Japanese, Nagasaki 1860』などを執筆刊行している。これは明治になって改題のうえ再版、三版されて、日本の英語教育に有効な影響を与えた。彼が日本語学習、研究にいかにか熱心であったかをうかがわせる。リギンスについて英語を学習した石橋助十郎(政方)は、明治にはいつて、横浜に移りその英語所で、ブラウンとともに日本人に英語を教え、かつ英日対訳語彙集、『英語箋』を編集、出版、これも明治にはいつて、改訂版が再版されている。

しかし、リギンスは一八六〇年(万延元年)に帰国した。同僚のウィリアムズはなお残留し、英語以外に数学などを教えているが、彼も佐賀(嘉)藩の碩学、笠戸順節や谷口藍田とまじわりついている。藍田に英語や海外事情を教え、自らは藍田から和漢の学について教えを受けたという。^{*)}そして長崎奉行の要請もあり、洋学所などで英語を教えるところがあった。しかし彼もまた、慶応二年(一八六六)に一旦、アメリカへ帰国した(明治二年再来)。その点、もつとも注目されるのはフルベッキである。ことに日本の近代化と教育に直接ふかくかかわったのはフルベッキをおいてはいない。

フルベッキについて小著でもすでに紹介したので、個人的履歴についてはそのほうにゆずるが、彼はオランダ、ユトレヒト生まれで、二二歳のときアメリカに移っている。したがってオランダ語に精通していたことが日本での布教に適任者として教会の日本派遣に選ばれたわけで、時に二九歳であった。フルベッキが長崎に来たときは、既にリギンスやウィリアムズが居り、同じ宣教師として、まず彼らと同じような行動をとったのである。

さて、フルベッキが日本近代化の偉大なる演出家となるには、三つの段階が設定できると思う。その第一は、来崎と個人的な英語教授、聖書などの宣教という宣教師としての行動である。これは時期的に、来崎より文久三年（一八六三）に〈洋学所〉（英語所の改称）の教育という公的な施設と関係をもつまでの間である。したがってこの段階は先任のウィリアムズなどと同じ行動といつてよからう。第二は、洋学所が語学所と改称され、さらに発展改称した〈済美館〉（慶応元年・一八六五）において、宣教師というより教育者に变身して活躍の場を見出すことになったときである。また佐嘉藩設立の〈致遠館〉の教師となつて、藩の俊才を教えることとなるのである。第三は、明治二年、新政府の開成学校の教師として招聘され、日本の近代教育の中核部で活躍、明治十年に退任するまでである。以後は再び宣教師として伝道に活躍するという経歴になる。

まず第一の段階について考えてみよう。一八五九年（安政六年）十一月、長崎に来たフルベッキは他の宣教師と同じく日本語の勉強や日本の知識人と交渉をもつて漢訳聖書、漢訳科学書を頒布供する仕事をおこなつた。へ一八六〇年一月三十一日までの年報中に、へわたしたちの働きは、これら（両刀をさした立派な武士階級）の人々から始められなければなりませんと記している。やはり新時代を担う階層への目のつけどころは確かである。これがフルベッキの成功の一つであった。

フルベッキが幕府と関連をもつようになったきっかけは、長崎奉行から依頼されて英語を教えていた役人の一人が、

フルベッキの秀れた教え方などについて上司に報告したところからであった。

私見ではフルベッキが長崎で次第にその志を実現できた要因の一つは、やはり積極的に日本語を学習したことであり、その日本語を教授されるに値する人物を求めて、よき師を得たことである。一八六〇年十月十六日、アメリカの教会のフィリップ・ブルツ師宛手紙に、日本語学習のテキストと関連して、ヘオランダ語で書かれ、ホフマンが改訂したドンケル・クルチュスのものと、フランス語で書かれたレオン・ド・ロニーの著作です」という記述がみえる。ホフマンは拙著で考察したように当時オランダ・ライデン大学の日本語学者、J.J.Hoffmannのことであり、クルチュスのものとは当時長崎に滞在のオランダ商館長D.Curtiusの著わした『Japansche Sprakleer / 日本文法 Leiden, 1857』(一八五七年、ライデン刊)である。^(*)これは研究者が評価しているように、ホフマンの補註によって原作の面目を一新したほど充実した日本語文典——オランダ人によるオランダ語の最初で最後の日本語文典——になっている。フルベッキがどこでこれを手にしたのか興味もたれるところであるが、おそらく、出島の蘭館に出入の間にであろう。もう一つは同じく、拙著で考察したI.Rosneyの『Introduction a l'étude de la langue Japonaise, Paris 1858』(一八五八年パリ刊)であろう。両著者とも一度も来日していないが、しかしほとんど独学で日本語をマスターしたオランダとフランスの東洋学者であり希有なる日本語学者である。このロニーのものは、どのように入手したのであるか。あるいは先任のリギンスやウィリアムズの所有していたものであろうか。それとも米国で入手して来日の際、持参したのかもしれない。最高の日本語学習テキストを入手して、いっそう勉強にもはずみがついたと思う。拙著『西洋人の日本語発見』(創拓社)で指摘したが、フルベッキは一八六一年六月二八日付の手紙で、へわたしが立派な新しい(日本語)文法書を書くためにはかなり時を要しますので、短時間でこれをやりとげたいという考えは、今のところ放棄しておきたいと思います」とみえて、日本文典記述の素志があったようにみられる。

また、同手紙には、ヘシー・ホルト博士は——前におったすべての米国人、ペリー提督などによってよく知られているけれども、空名の人物ですが——ホフマン（H）博士のあのすぐれた日本語の知識と、シー・ホルト博士の『日本語摘要』に関するホフマン博士の意見のためとで、H博士をねたんでいます。ホフマン博士の一人の友人から聞いたことですが、H博士は実に根気のよい語学者であり、現在では中国語、日本語およびその他のアジアの言語を三〇年以上も研究した人で、とくに日本語に精通した学者だそうだと記す。フルベッキがホフマン博士の一人の友人とはどういふ人物か不明ながら、シー・ホルトを空名の人物というなど、かなり手きびしい批判を下し、反面、ホフマンの日本語研究が高いレベルにあることの当時の評価をよく耳にしていることも判明する（ホフマンは自身の日本語文法書を一八六七―六八年にライデンで刊行している）。なお西周ら幕府の第一回和蘭伝習生がホフマンの世話になったことはよく知られていることである。フルベッキは一八六一年の年報で、ヘホフマン教授のオランダ文法書（クルチウスの日本文典をさす）の翻訳をやつてゆくに従つて、益々その著作の正確さと価値のあることがわかりましたともらしている。もちろんこの翻訳というのはオランダ語を日本語に訳する意であろうと思う。やがて自身で日本語文法を編集するつもりだったことも手紙でのとべている。

またロニーについても、へ偉大なるシナ語学者スタニスラ・ジュリアンのすぐれた研究者であります、この人は立派な、しかしごく簡単な「日本語の研究の序説」を書いていきます。これを英語にしたら、英国人のため唯一の日本語の研究の入門書として有用なものでありましょう。しかしレオン・ド・ロニーはホフマンほどに日本人の著作を研究して、古いポルトガル人の文法書から独立することができません。したがってロドリゲスの日本文法に示されている、昔からの解釈——動詞の活用について、とくに——を踏襲しました。これらの解釈はホフマンの新しい研究の進展によつて、すっかり捨てざられ、とつて代わられたのですと批判している。

ロニーについては、右の引用——ヘジュリアンのすぐれた研究者——は多分翻訳のミスで、原文はジュリアンに師事した日本語の研究者という文脈であらう。フランスの中国語学者ジュリアンに中国語を学び、パリの東洋語学校で日本語を教えた。ヘローニなどと漢字でも自署しているが、やはり幕府派遣の伝習生やその通訳、福沢諭吉、福地源一郎と交渉をもっている。

なおオールコックの日本語研究についてもフルベッキは批判しているが、ことごと左様に、フルベッキは来崎して短い年月のうちに集中的に、しかも最高のテキストを手にして日本語の学習研究にしたがったわけである。ことばが一国文化の象徴であり、民族の心の声であるという点で、フルベッキのこの地道な日本語学習や観察がやがて、つぎの段階にも重要な原動力となるのである。

一八六一年一月三日付の年報に「わたしたちは、今までに、この国で確固とした地盤を得、民衆と当局者の信頼を得ました。さらにまた、民衆の中に住んでわたしたちの目的が平和的なもの、公平な精神であることを立証したので、かなり交友の範囲を広げ、従って感化力を深めました」とのべている。なお、リギンスの離日後、フルベッキは中国のミッション印刷所の書物の販売と頒布の責任を引受けていて、その売却リストがつぎのようにみえる。

◇上海のロンドン・ミッション印刷所のもの。ヘの洋数字は売却部数。

ムアヘッドの地理書（二巻・七二〇ページ）へ14・同英国史（二巻）へ2・ウィリアムソンの植物学（二九六ページ）へ22・代数学（二巻）へ12・代数幾何学（三巻）へ12・クリスチャンアルマナック（七〇ページ）へ96・上海通報（各一四部）へ34・ハーシエルの天文学（三巻）へ34・ホブソンの医学書（五巻）へ38・ドクトル・レッグの智環啓蒙（香港版。一一〇ページ）へ14

◇寧波長老ミッション印刷所のもの。

ウエーの地理学（二四四ページ）へ58・寧坡通報（パンフレット）へ750・宗教史の略説（主要な宗教の教義、カトリックとプロテスタンチズムとの相違などを翻訳したもの。七八ページ）へ14・丁良驛『天道溯源』（二五二ページ）へ3・聖經真理概説（一九四ページ）へ2・ミルンの両友論（トラクト、六八ページ）へ3

合計四九六冊、および小冊子八四六部

右のように、単に宗教書のみでなく、人文、自然科学書のふくまれている点も注目したい。もちろん、すべて漢訳書である。かつては禁書とされたものもあるが、日本近代化のもう一つの発信地が中国であることを認識しなければならぬ（長崎と上海の交通はかなり頻繁であつたようである）。しかも一八六一年九月一二日付の手紙で、へS・R・ブラウンの『日英会話篇』が上海で印刷されたこと（これも日本人の英語学習に大いに利用される）とへ神奈川の友人からの手紙はわたしに重要なニュースを知らせて来ましたとして、へ日本政府は日本人の商人に外国の港へ貿易し、さらに船舶や航海者によって、それを奨励することを許可した。日本政府は米国商船、ダニエルウエブスターを買い、さらに、もつと買う用意をしています。この国の開国ほど重要なことは外にありません）など日本国内事情もよくキャッチしているわけである。さらに、興味ふかいはフルベッキが長崎についてつぎのように記述していることである。長崎は多くの点で、宣教事業にはすばらしく適した所です。七万人の人口を有する都市で、発展途上にあります。ここは「天領」（幕府の直轄の地区）で、わたしたちが陸と海とで回遊する場合、一定の制限された地域があり、天領の中には幾つかの人口密度の高い村落も含まれています。帝国の他の港からこの港に来て停泊している大船は、約三〇艘もあり、長崎は九州内の九つの藩国（藩）のどの都市よりも、日本中からここに来る旅人が非常に多いのです。江戸と、そこにいるうるさい役人たちから遠く離れていることが、わたしたちを面倒な事件から解放してくれます。この町の人々は、長年月にわたり外国人になれているので、臆病だつたり遠慮したりする様子もなく、わた

したちに近づいてきます。外人居住者は概して行儀のよい人々なので、外人と日本人やまたは政府の役人などとの不愉快な衝突などはありません。それから最後に大切なことは、氣候が健康に適していることです。

右の記事はやはり長崎および長崎住民の多年にわたる国際的認識度の高さを示すことにもなろう。鎖国の間、長崎を唯一の公的に開かれた窓とした幕府の政策は正しかったともいえる（もつともこれは長崎のみではなく、はやく外国人と接していれば同じ現象を呈したかと思う）。『長崎海軍伝習所の日々』の中にも、長崎のもつ風土性がすばらしいことに言及しているが、さらに、これは蘭・英・米・仏の人びとに対してだけではない証拠に、同書からつぎの記事を引用しておこう。

五百名のロシア人はこの冬稲佐の寺院で暮らした。彼らはその住民と非常に懇意となり、到るところの農家に、あたかも家族同様に、食事も飲茶も共にしていた。

以上のようにフルベッキは着々とその地歩をかためていった。しかし彼のもつとも重要なことはキリスト教布教である。聖書バイブルを普及させることである。文久二年以降の手紙にもこの点の記述が目立つ。へこの港に英学研究の施設があるので藩主から派遣された三人の侍も、へ一週間二度わたしの所に来て、「ヨハネによる福音書」を読む。やがてバイブルクラスも設けるといふわけである。文久元年（一八六一）の手紙につぎの記事がある。

教えることについて、一カ年を通じ七名の英学生がおりまして、その内三名は政府の通訳で、残りのものは、英学研究の目的で他の藩主から派遣されたり、または自発的にやって来た役人または学生たちです。それらの中でも上達した学生には漢文と英文の聖書を与え、それを読んで比較対照するように、勧めています。無論、研究のためでもあります。宗教上の教えとしても、読むように勧めています。これらの学生たちには、ミッションの出版部で刊行している初級と、第一リーダーを読ませております。その中の一人だけが、宗教に関心をもっているらしく、

いつも聖書を研究しております。

そして一か年に扱った漢文の書籍として、つぎのものがあがっている。

科学、歴史、地理に関する著作、大部分上海のロンドン・ミッシオン印刷所のもので、一六〇冊

宗教に関するパンフレットや小冊子、一七〇冊・漢文の聖書、一九冊・英文の聖書、二冊・漢文の新約聖書、一八

冊・英文の新約聖書、三冊・ベッテルハイム（伯徳令）博士の日本語訳路加伝福音書、六冊

ミッシオン出版部の初級および第一リーダー、各二〇冊

そして、さらに、へ以上の書籍や聖書は今、優秀な人々の手にわたり、これらを読んで、内容について、なかなかすぐれた理解をしています。他の藩から別々にやって来た二人の役人が聖書を受け取って、二人ともその藩主に、これを献上したいと申しておりますとみえる。聖書に対する当時の知識人の関心の深さもまた一驚するところである。

一八六二年八月二六日の手紙には、へ宗教論集の第一巻が着きました。成功です。わたしは知人や来訪者に配付していますが、それらの人とは別に、わたしから多数の本を受けとった一人の老医師が都、大坂、その他の地方に送るため二〇〇冊から六〇〇冊欲しいと申してきました。わたしはこれらの注文に応じて本を渡し代金を払ってもらいますと。この老医師は何物か不明であるが、知識人とのフルベッキの接触は大成成功といえる。同じ手紙の中に、へわたしは日本において三人の着実な聖書の読者について記録しますととして、佐嘉藩の三人——うち一名はフルベッキの家に住みこみ、藩主から派遣されて英字修業をしたとみえる。他の二名はおそらく佐嘉藩の家老、村田若狭、同弟、綾部であろう。のち、洗礼を受ける——と接觸し、へ三人はいずれも立派な学者であり、新約聖書の英訳、蘭訳および二種類のちがった漢訳をもっているとのべている。この出逢いが、やがて、フルベッキと佐嘉藩との強い結びつきとなっていくわけである。英語より聖書への関心が先行している点も注目しておきたい。

こうしたフルベッキの地道な活躍はいよいよ幕府機関の認めるところとなる。つぎの元治元年（一八六四）八月二二日付の手紙を一読されたい。

生徒は役所で二度も昇進していましたが、その英語の熟達ぶりに、満足の意を表し長崎で幕府所管の学校（済美館）の外国の学問と語学を受け持ったためわたしを招聘する旨を奉行が江戸表に行った時、幕府に上申したということでした……本月二日から一週間に五日間、一日二時間学校で教え始めました

* 済美館では外国語として、英・仏・魯の三か国語を教えた。また、外国の学問としては、歴史・地理・数学・物理化学・天文学・経済などが教授された。なお医学所の司馬凌海（松本銚三郎）はフルベッキから個人的にドイツ語を学習したという。また、済美館、医学所の相互交渉も当然あったわけである。

フルベッキが「政府の学校」という済美館に職を得たことは、とりもなおさず、先に設定したところの第二段階へと前進したことである。いわば、次第に宣教師より教育者へと転向していく第一歩でもあった。そして、一八六六年（慶応二年）五、六月のころ、先にふれた「肥前藩主の家老、若狭と綾部」に洗礼を施したことを記す。さらに、「肥前」は当時、日本においては一般的に啓蒙的で進歩的な政策を採用している藩であり、青年を教育するため、すばらしい学校組織を有する点で知られておるのです。その代々の藩主は多年にわたり、欧州の科学や研究と紹介とを、主として蘭学書を通じて促進しかつ奨励しているのです」とみえる。フルベッキが佐嘉藩と密接な関係をもったことを示唆する。すなわち致遠館でも教えるようになるのである。慶応元年六月五日の手紙には、「一か月余り前に学者としての名声ある日本語の新しい教師を得ました」ともみえるが、これは佐嘉藩の碩学、谷口藍田（韓国系の儒者）のことであろう。

佐嘉藩々校、致遠館では大隈八太郎、副島種臣が中心となって同志を集め、フルベッキから英学、新約聖書、聯邦

志略、万国公法、数学などの指導を受けた。しかしフルベッキの手紙を読んでいくと、ほかに薩摩、長州、土佐、肥後などの各藩の有志もここに来て教えをうけていることがわかる。さらには、遠く加賀藩主、前田侯などもフルベッキには関心をもったようである。反面、大隈重信や谷口藍田側からの資料によって、彼らがいかにフルベッキの影響を受けたかも判明する。^(*)

慶応三年（一八六七）三月一日の手紙で、日本人が洋学を修め得る最善の方法は教師や一人前の技師を長崎に派遣して日本人を教えることとすとのべる。洋学、すなわちヨーロッパの近代学問の指導者は外国人の多くが集まっている長崎でこそ修得できると断じているわけである。近代教育の発信地こそまさしく、長崎なのである。こうした点で、近代史のうえで重要な役割を演じた大隈重信や副島種臣など、フルベッキに大きな影響をうけたものとして特筆できよう。もちろん、佐嘉藩のものだけではなく、九州・中国・四国の諸藩の藩士も長崎に來り、済美館や致遠館に出入し、フルベッキからの直接影響を大きく受けたと思う。

第三段階として、時が改まって明治という新時代になるわけで、いよいよフルベッキが日本の中心、東京で活躍することとなる。

フルベッキは一八六七年三月一日、J・M・フェリス（アメリカ在住）宛に、へ横井兄弟二人がお世話になってすみません^レではじまる手紙を書いている。へ彼等はりっぱな、しかし貧しい家庭の育ちだそうで、それは真実だと思えます。日本では外国人の標準から見れば、最もりっぱな家庭が案外貧しいのです^レという（この点もよく日本のことを理解していると思う）。そして同手紙でまた、へわたしは有力な薩摩藩士の五人（明治元年十一月の手紙で五人の名と専攻を示している）に紹介状を書いて与えました。彼等は五ヶ年間の学資を潤沢にもっておりますし、ニューヨークの一流人物に紹介状を書きましたから、あなたにご迷惑はかけないでしょう^レとある。フルベッキが佐賀藩のみでなく、他の藩とも多く交渉のあったことを示唆している。前者は横井小楠の甥、横井左平太兄弟をさす。済美館でフルベッキの指導

をうけたもので、慶応二年アメリカ留学をとげた。このほか福井藩士、日下部太郎など、アメリカ、ラトガース大学に留学、二六歳でかの地で死亡したが、秀才ゆえに今に記念碑のある学生なども世話している。さらにフルベッキは明治三年には致遠館に学んだ岩倉具視の子、具定、具綱のアメリカ留学についても紹介の労をとっている。幕末、明治にかけて、いわば明治維新の重要な主役者の一人、岩倉具視ともフルベッキは親しくなるのである（これも明治にはいつのフルベッキの活躍に関連してくる）。

一八六八年（明治元年）五月四日、同じくフェリス宛の手紙に、へ日本人の多くのものがわが国の光輝あるワシントンの崇拜者であるし、ワシントンが樹立した諸制度の崇拜者であるように、わたしはとくに現在において、これらのことについて多くの研究者にかこまれています」といい、つぎの記述をみる。

一年あまり前に副島と大隈の二人の有望な生徒を教えました。これら二人は新約聖書の大部分と米國憲法の全部とをわたしと一緒に勉強しました。前者は現在旧い帝國の制度を改正して最近できた都の政府の會議の新しい参議であり、後者は九州全体の總督の一員であつて、新政府の憲法の改正に関連して、首府「都」に向けて数日のうちに出発する予定です。

さらに、翌一八六九年二月二三日の同人宛手紙で、へ今月一三日、現在江戸にある帝國政府から一人の高官がとくにこの港に派遣されてきて、わたしに東京に出仕するように通達して来たのです。わたしの知る限りでは、主なる目的はわたしに大學成立の任務を与えるということなのです」とあり、同年三月三一日付手紙（横浜）で、へ江戸におけるわたしの特別な任務については、わたし自身もまだはつきりとその詳細を知りません。ただわたしをここに招聘するに至った帝國政府の重要な人々の信頼を受けていることだけは申しあげられます。これはこうです。東京（江戸）にわたしを召し出した表向きの、そして無論、究極の目的は帝國大學のようなものを設立する役目をわたしに与えること

でした」とみえる。そしてさらに、一月二九日付の同人宛手紙の一節にも「大学の仕事に忙殺されております……大学には英文科と仏文科とがあり、学生は七〇〇から八〇〇人の間で、年齢は八歳（やうせい）から四十歳まであります。年長の学生の多くは助手として働いています。四人の英語教師と二人のフランス語の教師、いずれも外国人で、その約六倍の日本人教師と二人の日本人の学部長の外は大学関係の事務職員が大勢います。これは学校の機構の大きさを概括したものです。いずれ近く暇を見て教育制度全体の詳細を報告いたします」とみえる。明治にはいつて、フルベッキが長崎から江戸（東京）へ日本全体を統括する大学の重要な地位に座を占めたことを意味する。済美館や致遠館で日本人に接した一外国人教師が、こうした国家的に重要な仕事に責任をもつてあたることになるが、——実力や評判だけでなく、フルベッキも到るところでもらしている——、彼が新政府の高官、とりわけ佐嘉藩・致遠館での教え子、副島や大隈と特別な関係をもっていたからにはかなるまい、さらに明治維新、明治新政府で実力ある行動と実施に従事した岩倉具視などと密接な関係をもった事を見のがすことはできない。司法省の加太邦憲は、「法典翻訳と外国教師」（日本及日本人七一四号）で、このべている。

明治二年に至りまして、鍋島閑叟の思召で、此の如く拙者共の一藩（佐賀藩）丈けの子弟数名を限って学ばしむるよりは、寧ろ幕府の開成所を復興して、此のフルベッキを教頭に挙げ、其他に尚ほ数名の外国人を雇ひ入れて、全国より秀才の聞えある者を東京に集めて、大に西洋学を修めしめたら宣しからふといふ処から、此の事を朝廷へ建議されたのサ、然るに朝廷でも幸いに此議を容れて、とう／＼幕府の開成所を再興して、開成学校と称したので先にあげたフルベッキの手紙の文言とも一致する内容である。へ朝廷とはとりもなおさず、岩倉具視など公家と置きかえてよく、もとより岩倉、フルベッキの特別な関係が一つの力となつたと思われる（岩倉具視を团长とする遣欧米使節団派遣の企画もフルベッキにおつてゐることがフルベッキの手紙によって判明する）。これに大隈が関与していること

は、明治二年二月七日付の議定、東久世中将（通稱、いわゆる七卿落ちの一人）の大隈重信宛書簡に、（今度フルベツキ御雇入之事に付、山口範蔵、長崎表へ罷越候得共、唯東京呼迎諸事談合は不苦間敷候得共、彼者ハ耶蘇教主ニ御座候間表向政府ニテ御雇入ニテハ議論如何可有御座候事」とみえるところからも肯定できる。ここで大隈のキリスト教認識が有利に働いたであろうし、フルベッキが新政府の中樞となった薩・長両藩などとの強い信頼関係もすでに実証済みであつたろうから、表向きの宣教師云々は、まさに、致遠館派の人びとによる協力を得て、大隈らがうまくのり切つたと思われる。一八七〇年七月二一日の手紙には、（数日前に文部卿と大学の当局者はわたしを大学の校長に推挙したので、わたしの職務はさらに増し加りました）とみえる。

極論するならば、開成学校は済美館・致遠館の東京版ともいうべく、新しい教育を新しい革袋にもるに絶好のサンブル、依るべきモデル学校がすでに用意されていたといつてよからう。旧幕の機関はいずれも静岡藩、沼津学校へ移動しており、人材、人物ともに旧幕府に属するわけで、長い時間をかけねば構築できぬ教育の分野ではむしろ無に近い状態からの新しい近代的教育制度にのつた学校の建設という難題があつた。その点もつともふさわしい条件と實力をそなえた人物——フルベッキにこの重責を依頼したわけである。明治五年の学制発布は近代的教育制度の第一歩であり、法令のはじめであるが、これももちろんフルベッキの建白するところであるという。いうまでもなく、ただ一人、鍋島閑叟や大隈重信、岩倉具視の力によつてのみ近代教育の基礎が確立したわけではない。まして、外国人フルベッキ一個人の力によつたわけでもない。

すでに考察したように、旧幕臣の中にも、長崎海軍伝習所で教育を受けた人びと、使節の随行や留学の海外経験や知識をもつ人びと、あるいは開成所や昌平校のスタッフ中の進歩的な人びと——新政府の人材不足は当然のことである——、多くのいわば旧幕府から継続したよきものと、さらに新しく来日の宣教師らに教育された日本の英知、そ

したもうろの要素こそが、その代表選手として、フルベッキを選択し、これに近代教育建設の重要な担い手という使命を託したということができよう。そしてさらに忘れてならぬ点は、その近代の発信地が長崎であるということである。

明治三年のフェリス師範書簡で、フルベッキは日本人が西洋文明の物質方面のみでなく、いわば、へ表面よりもつと内在的な力をもとめる人々が多くいることを指摘してこうつぶつてゐる。

西洋の学問や科学に対する実際的な渴仰が広く及んでいます。ここには、英語、仏語、独語を学ぶ数百の学生のある大学があります。これ以外に、いくつかの日本人の経営する私立学校があつて、主として英学を教えています。この外、何ら学校に通わず書籍により独学するものも多数あります。他の開港場にも数百のこういう人がいます。そこには三つの大きい病院と医学校があります。そこでは八人の外国人の医師が働いています。西洋医学は、やぶ医者や無数の漢方薬の処方箋による古い漢方医術を凌駕しております。新聞は各地で発行されており、外国通信や外電の記事が米国の代表的新聞から切り抜いて翻訳されております。英仏の書籍を売る書店が方々にあるし、輸入した書籍も山ほどあります。すべてこれらの外に多くの他の事柄においても西洋の知識に対する渴望の熱烈さを示しています。さらに勇敢な青年はなつかしい故郷を去り、米国や英国の学校や大学に学び、自国で学び得るよりも、もつと徹底して研究心をみだし、帰国後十分の研究の成果をもつて、大いに祖国に奉仕しようとしています。むろんこの国が初め開けた時は、ただ語学のみが研究の主要目的でした。漸次、この目標はそれ以上の探求をするようになり、ついに今日においては、法律、経済学、さらに進んで学術的、道徳的な学問をも包括するようになりました。これらの努力が成果を結ばないということはありません。幾つかの良書がすでに日本人の学者によつて翻訳され、出版されており、更に続々と刊行されることになっております。それ故、年齢や事情が外国語を学ぶ程でない

者までも、必要な知識を理解し得るに至っています。現在わたしたちの大学では『ナポレオン法典』を仏語から、『ペリーの経済学』を英語から、『フンボルトの宇宙論』をオランダ語から翻訳して出版しております。前二書については、ある個所は既に出版されております。「わたしはバックルの文明史第一巻を読んで、第二巻を読んでいる」とか、また一人の日本人が『ウェランドの道德科学』を読んでいるがそのむずかしい個所を解釈してやって下さい」などと言うのを聞くのは、誠に喜ばしいことです。

こうして、へこまでの進歩は土地を耕す時期と同じで、その後祝福された種まきの時、さらに最後に收穫の時が来ることをと結んでいる。フルベッキの考察は日本人自身が記録しえなかった貴重な維新の日本人像であろう。

新政府に招聘されたお雇い外国人の第一号として、フルベッキの果たした役割はいくら高く評価してもしきれぬところである。率直にいつてしかし私見ではその内面的、思想的な点でのフルベッキの近代日本での足跡——安政六年の来崎以来、長崎での活躍と明治二年に上京して新政府の中心的スタッフとして活躍したこと——を総合的に考察したものをしらない。いわば明治の花形お雇い外国人であるフルベッキは維新前の十年こそ重要であることを確認しておきたい。

明治六年、フルベッキは南校を退任、法律顧問として正院（内閣）の翻訳局と左院（立法院）に兼務した。いわば、バトンを新時代のへお雇い外国人にゆずることとなる。明治三十一年三月、東京で死去、六十八歳、門下生や知人によりへ故フルベッキ先生記念金募集がおこなわれた。その趣意書には、へ副島種臣、前島密、菊池大麓、高橋是清、加藤弘之、細川護成、大木喬任、津田仙、何礼之、杉亨一、伊沢修二など当時の政府高官をはじめ名士が名をつらねている。いかに彼の影響が大であったことか、あらためてしられよう。

欧米使節派遣 とフルベッキ

日本の近代史上にあつて注目すべき岩倉大使一行の欧米派遣は、その裏にフルベッキの建言が重大なポイントを握つたといわれる。これはまた、大隈重信ともふかいかわりがある。この点で一八七二年八月六日付、J・M・フェリス宛のフルベッキの手紙が参考になる。これまで公的に紹介されることがなかったので、資料として全文を引用してみる。これには、フルベッキのコメント的な文言があるので、そのへんから引用する。

お送りいたした文書は公開できないのです。それらが一般に興味があつても、これら文書は決して公開してはいけません。もしわたしがやっておる仕事を発表したりするならば、この国におけるわたしの役目は終わつてしまふのです。この国の人々はわたしが為すこと、及び彼等に関して知っていることを、人々のように全然口外したりしないことを知っているからこそ、彼等はわたしに絶対的な信頼をよせているのです。新聞に掲載されているものは全く普通のことです。もう一つのこととは、もっと重大です。事実、総理大臣で、しかも全権大使一行の長である岩倉が、わたしに一度ならずこう申されました。「政府を難局から救うことに尽くしてくれた」と。そして大使一行は出発され、北米合衆国に向かいました。

わたしはあなたにお目にかかつて、事の次第をあるがままに、すべてお話できたらと想います。しかし現在のところ、ほんの概要しか述べることができません。

わたしが一八六九年に江戸に来たときは、強い排外感情が国内にみなぎっていました。それは幸い、短期間だけで静まりました。しかし有力な友人たちが、わたしに外国へ使節を派遣することは、この秋か冬になる可能性があ

ると話してくれました。このことがわたしに次の文書を作成することを暗示したのです。この文書をわたしは一八六九年の六月一日頃、秘かにわたしの友人大隈に送りました。大隈は当時も現在でも、政府の重要人物の一人です。わたしはこの文書が同氏の手に渡ったので満足して、そのままに放置して、そのことに關して、決して人に語ることも、あるいは更に質問されることもありませんでした。この文書を届けられた当事者からも、そのことについて、何も聞かれず、放置していました。そのうち時は流れて、遂に政府にあらゆる外国との条約改正の期日、すなわち一八七二年七月五日が切迫して来たので、非常に苦慮したのです。ところが一八七一年一〇月二六日、岩倉がわたしに同邸に来るようになってきました。まず普通の儀礼的な挨拶が済むと「あなたは文書を書いて、政府高官の一人にそれを手渡したことはないか」というのが彼の最初の質問でした。「思い出せません、もっと率直に言うて下さい」——「かなり前になるが、あなたは大隈に何か送ったことはないか」——わたしはじつと考えて「ああ、二年前かあるいは、もっと前でしたか、欧米への使節派遣について」——閣下は意味深長にうなずかれた。——わたしは「エエ、あの当時は事態はまさに重大でありました。今ではほとんどその詳細を覚えていません。時勢は変わりました。現在ではそれは時宜にかなわんかもしれません」——「今こそ、まさにその事態なのだ。自分はまだ、その文書を見たことがない。わずか三日前に、それについて聞いただけである。自分は明日その翻訳文を手にかけることになる。しかし、どうか、今あなたがそれについて記憶していることは何でもよいから話してくれないか」。このように、わたしたちは話し合つて、ついに三日後の一〇月二九日、その文書を手にして、もう一度、問題全体について話し合うという約束をしました。そしてわたしたちは一節一節について話し合いました。終りに岩倉は、政府がなさなければならぬのは、実にそのことであり、且つ唯一のことであり、そして、わたしの出した計画案を厳密に一字一句、その通りにやうて行くべきであるとわたしに言いました。その後、何回も会見が

行われ、そのうちの何回かの会見は夜の深更まで続きました。使節一行は（わたしが二年以上も前に信仰に基づいて描いた）わたしの文書に従って組織され、わたしの文書が岩倉及び天皇に知られるに至った日から二カ月経って出帆しました。あの方々がどうやって条約改正間近の難局を乗り切ることができたであろうか。もし岩倉がその任に当たっていなかったら、改正は全然問題となることはできなかったでありましょう。ある方々はどうやって、この重大な仕事に自らを適応することができたろうか。わたしの書いた計画案を実行することにより、むろん、わたし自身は主要な随員ではなかったけれども、使節一行に二人を推薦しました。わたしはあの方々が通って行く旅程を調整しました。しかしこのことすべては、わたしの心の奥にある宣教の使命に比べるならば物の数ではありません。わたしにとつてわたしたちの宣教目的と宣教の自由に関すること以外は問題ではありません。もし主がこの場合や他の場合に、宣教の自由とは実際いかなるものか、またそれによつて国民の将来にどういう影響を及ぼすかを、この国の人々に示す機会を与えられれば、これこそわたしの言うべきことは、「わが魂の主に祝福あれ」です。そしてまた信教自由の問題に当たる人々が今まで、それを誤つて理解していたが、今はじめてこれを理解するに至つたのです。以来数々の証拠を得ました。——何故大隈がかくも長い間この文書を自分の所に保管していたのかとお尋ねになるかもしれません。わたしもそのことを尋ねたら大隈（わたしの以前の生徒の一人）は曰く、わたしがそれを彼に与えた当時は烈しい排外感情の盛んな時代（一八六九年）で、彼は既に保守主義者たちから、大隈は改宗者だとの疑いを受けており、彼の高い位を危うくする恐れがあつたので、その文書を何人かに見せるのも恐れたのだと語りました。しかし、暫くしてから彼はそれを彼の友人と同僚に示し、こうして、その文書は静かに、その効力を表わし始め、ついにちょうど、最も好運な時に政府首脳の手に達したのです。確かにわたしは自分の忍耐の足りないことを恥ずかしく感じ、且つ神の時が人の時ではないということを、目ざましい状況で知りました。しかしあなたはこれ

に関連したあらゆる状況はおわかりにならぬから、その事情の一切をご理解になることは（失礼ですが）むずかしいと思われます。

よしわたしが公表するために書いたり、言ったりすることをしなにしても、わたしは時間と機会とを空費しているではありません。わたしが外見的には教育事業に従事している間にも、神が好機を与えてくれるままにわたしは心と手許にふれるあらゆる事柄の中最も重大な宣教目的を胸中に秘めているのであることを、あなたに示す次第です。今、わたしはこれらすべてを、あなただけに書くのであって、一般には公表しません。わたしが前に申し上げたように、このようなことを公表することは、わたしの不変の生活原理に反するものでありますし、わたしの名声をそこない、かつ少しづつかちとるのに十二年間もかかった、人々からの信頼を失ってしまうからです。その上、この使節派遣の計画を起草した外面的名譽は、使節一行に任せるといふ暗黙の了解が岩倉とわたし自身との間にあったのです。もしわたしたちが、その恩典、すなわち信教の自由とその計り知れない影響が部分的には、現在、使節一行の帰朝後には、はつきりと獲得せられるとするならば、誰が単なる名声や光榮に煩わされましょうか。（後略）

右につづいて、フルベッキが大隈重信にひそかに与えていたという「草案」をつぎのように記載している。

草案の概要 (Brief Sketch)

日本国の繁栄を促進させようとする有識者から、しばしばわたしは、政治の形態、諸外国の法律、司法行政、諸国間の政治的平等、教育の方策、宗教制度、その他、西洋文明に関する他の同様な諸問題について、質問を受けております。

上述の質問の多くに対して、満足な回答がここで与えられるし、また書籍からも得られましょう。そしてそれが一人の外国人で、従つて、たぶん十分に信頼されていない一人の人間の回答で、しかも大部分は抽象的な理性の結果によるのではなく、むしろ数世紀にわたる実践と経験の結果による諸般の制度組織について書籍から得た知識が一体何になるだろうか。こうした回答と知識は理論上ではやや正しいけれども、西洋文明の幾分かを十分に理解するために、直接見て、感じなければならぬ何物かがあります。文明の理論を他の国々に適用し得るよう、十分に、それを理解するために親しく視察して経験することが必要であるし、なお、自分の眼で見た証拠ほど確かなものはありません。

西欧諸国の現状を十分理解するに至るためには、その根本原理を知るのみならず、さらに、またその実際の運用を観察しなければなりません。わたしの言うのは、制度組織や理論体系の研究を行い、必要ならば、それらに基づいて実験するというのでは成功はしない、という意味ではありません。がしかし、実験は時間と金を要するし、また時として危険でもあります。機械工学や科学における実験は成功しない場合、車輪や槓杆を破壊する程度ですむし、また瓶が破裂するぐらいですみますが、政治における実験はもし失敗すれば、人間の幸福を破壊し、その破壊はさらに全国民に及ぶかもしれず、その実験は混乱を生じ、貴重な生命を失うことになります。それ故、立法、財政、教育などの重要な事項については実験する必要はありません。なぜかというところヨーロッパ全体が、それを研究し、模倣しようとするものすべての人々の前に開かれているからです。欧米においてはあらゆる種類の政体、法律、国家財政、および教育制度は数世紀にわたり実験せられて来たもので、現在欧米に存在する国家の制度はこれらの実験の結果であります。欧米におけるあらゆる面で、りっぱな文物を研究し、採用することもでき、それとともに、またあらゆる欠陥を知つてこれを避けることもできるのです。わたしがあえて、二、三の見解を書き記すのは、

上記の質問や考え方に關してであります。すなわち、これらの見解は有益で、実行可能な方向に、以上の興味ある質問を多少でも、導いてゆく助けとなればよいし、もし、これらに最も関心をもつ人々が、これを望むならば、さらに広く、敷衍して説明したいのです。

天皇は、この秋か冬（一八六九年）、条約国の宮廷に特別な使節を派遣したい意向であることが一般に伝えられています。それは、実にすばらしい考えであります。なぜかと言うに、以前一度以上、外国に使節が派遣されたけれども、それは「將軍」という臨時的な支配者の下で派遣されたのであって、海外の情報を得るよりも、むしろ將軍に好感を持たせようとするのが目的でありました。しかしそれ以外に、どんな情報を得たとしても、現在の政府に大して効果のないものでした。全体として見れば、政府自体の使節を海外に派遣することが、現在の政府にとって善い効果をあげることになります。

さて、欧米に使節派遣の議が本當に企画され、しかも特別な、内密な性質の目的をもつて派遣せられるということが想定されたとして、わたしは一般的な性質をもつた有益な事柄に關し、二、三、わたしの考えを發表することを許してもらいたい。

天皇と政府によつて、全權大使という重要な職務に選ばれ、任命される人物は、位の高い人物であつて、天皇と國民が全權使節のすぐれた知性と勇氣と高潔な人格に対して十分な信頼をおく人物でなければなりません。こうした使節が日本に歸つて來たとき、その忠告は非常に価値があり、多分、國民の福祉の増進を實現するであります。そしてまた、使節に隨行する役人たちは學識、人格、兼ね備えた人々であること（備考、たぶん天皇は帝國の勢力のある階級——公卿および大名——のいずれかの代表者を派遣する考えです）。

使節の特別な目的がいかにあれ、一般的目的の一つは、次の如き方針で、歴訪する各國の宮廷に挨拶すること

です。

「帝国は大なる政治的変革を遂げ、將軍の一時的支配権は廃止され、天皇は尊嚴なる皇祖の如く、自ら帝国の統治権者となり、従つて国内の政治の改善を計り、さらに一層の改革が適當の時期に実現されるよう考究中であります。陛下はまた日本政府が諸外国と平和と友好の精神において、外交關係を繼續する意向であり、それとともに、それら諸外国との關係を保ちつつ、諸種の変化と改善を望んでおられる、それらのうち特に、西欧諸国との關係において、日本は特有な立場にあるので、西欧諸国は日本を政治上、対等に置くことを認めず、従つて日本は國際法によつて考えられた世界各国の國際社会には、十分に受けいれられ、承認せられているとは言われません。

天皇陛下は日本帝国が西欧諸国と比較して政治上の平等がないという理由は、各国には、おのおの異なる憲法と法律があることによると気づかれました。それ故、陛下はできるだけ早く、この国を西欧諸国と完全な平等の地位にひき上げたいと希望しているのです。すなわち、こうした望ましい変化をもたらし、その予備的折衝に入るために、天皇陛下は条約国の諸政府と協議するため特命全權使節を派遣します。その使節の一つの重要な目的は、日本政府が諸外国との關係において、上記の如き変化をもたらすために、如何なる方策と手段を取るべきかを諸外国政府から聴取するにあります。また陛下は、通達してある各国政府の好意によつて、日本政府が政治的平等の設定のためとるべき重要方策の数々を（文書にて）特命全權大使に与えられるよう望んでおり、なお使節代表と随員に対し、外国政府がこの目的のために喜んで迎え入れ、役人や政治家と提案された諸問題について、十分協議し得るよう特別な計らいを願っています。——陛下はかくして与えられたあらゆる忠告を正しく考究し、国家と国民の特質に適するものならば、喜んで之を採択するとの意向であります。等々」

さて上記の挨拶に対して与えられるべき回答の一部を推測することはむずかしいことではないが、その要旨は大體次の通りであります。

一、日本の法律、特に民法、商法、刑法の如きは西欧諸国の法律とは、あまりに異なっているので、それらの諸国民やその財産を、日本の法律に従わしめることは出来ないので、むしろ日本の法律そのものを西欧諸国の法律の標準に近づくような方法によつて改正すべきである。

二、日本の文明（主として教育による）は西欧諸国や北米合衆国に発達した文明とは、その性質において、非常に異なっている。

三、日本政府は外国人に対し、帝国内いづれの地域にも旅行し、交通し、居住する権利を与うべきである。こうした権利は既に、日本から欧米諸国に旅行する旅行者に与えられている。

四、西欧の宗教に対する昔からの禁令の高札は撤廃さるべきであり、従つて日本人の信徒等が、平和をまもり、公然たる罪を犯さない限り、その信仰のために彼等を迫害したり、死刑に処するようなことをしてはならない。（末尾の「信教自由」の項参照）

五、日本政府は外国の主要な都市と港に公使館と領事館とを設置すべきである。なお、他にそれほど重要ではない題目が出されるかも知れません。一国の政府はある特種の点を強調し、他の政府は他の点を主張することもあり得るのです。しかし以上の件は、将来生じ得る主要な諸問題を包含すると想定してよいのです。

わたしがこれまで述べてきたことは、多分すでに政府の重要な役人たちに思い浮かんだことなのです。しかしながら、わたしが今提案せんとすることは、多分、全く新しい見解であつて、それは次の諸点です。

上述のような回答を予期して、計画された使節一行に関し、随員中から幾人かの理事官を任命し、それらの理事官

の下に秘書官を、その能力に應じて、配属させ、各自その担当の部門で働くというようにする。それは左の通りです。

A、三人の理事官と一人の秘書官で組織された専門委員は、世界中、高度に発達した文明国の中、四つまたは五つの国、例えばイギリス、フランス、プロシヤ、オランダ、北米合衆国の憲法および法律を単に理論だけでなく、また実際、運営されている面をも研究調査する。この専門委員の理事官は使節が歴訪した国々の外務省、国会、裁判所、事務所等々がいかに行われているかを一々見学、調査すべき義務がある。

B、三人の理事官と一人の秘書官で組織される専門委員は各国の財政に関する法律と制度、地方税および国税、関税、公債、紙幣、国立銀行、商業、取引所、商社会社、造幣局、保険会社等を研究する。

C、三人の理事官と一人の秘書官は国立学校、高等学校、普通教育に関する法律、公立学校の設立と維持、学校の規則、学習の部門、学校の試験と卒業証書を研究する。

この専門担当の理事官は大学、公立学校ならびに工芸学校、商業学校の如き専門学校の施行、運営を親しく視察見学すること。

D、四人の理事官と二人の秘書官で成立つ専門委員は各国の陸海軍の徴兵、組織、補給ならびに経理等の諸制度を研究する。

また兵器廠、海軍工廠、造船所、兵營、海軍兵学校、陸軍士官学校、要塞等を視察しなければならない。

E、西欧に行われている宗教の諸制度に関しては、使節直属の最高役人（副使節）の各人および全員は、その歴訪する国々について研究し得る特別な自由が与えられているので、果して西欧の国々の宗教において、もし切支丹禁制の昔からの高札が撤廃された場合に、日本の政府と人民に特別な危険と害悪が生じうるものがあるかどうかを、

よく研究するよう、特に命じておく。

備考一、使節に随行する理事官全部、特に秘書官は見聞したものを詳細に記録し、これを文書にし、又は印刷に付して、各自担当の分野に関するあらゆる可能な報告書を提出するよう命ぜられている。従つて本国に帰還の上、政府は必要な場合、国民の一般的利益と啓発のため、使節派遣の使命の結果を編集し刊行することができる。

備考二、使節は条約国の全部または大部分を歴訪することができるとしても、それらの制度が完全に研究されている国は、前記の如くフランス、イギリス、ドイツ、オランダおよびアメリカである。もしこれらの件がよく理解されたならば、他の事の研究をば、一国のみに時を費やす必要はない。例えばイギリスは外務省の分野で特に学ぶ点があり、なお他の国、例えばフランスの如きは大蔵省関係について、更に他の国々、たとえば、プロシヤとアメリカでは文部省関係で学ぶ価値がある、等々。

備考三、諸国歴訪の順序についてはインド航路で行くのが、多分、最もよい〔訳者注、太平洋鉄道が当時完成されていなかったから〕そして先ず最初にヨーロッパを訪ね、そこで用事を済ませてから、アメリカ通過帰国の途につけばよく、かくして世界一周する事になる。もし使節一行が秋に出発するとなれば、冬中、ヨーロッパにとどまり、それから春、合衆国に向かい、使節一行は大陸鉄道と太平洋汽船で帰朝されるので、ニューヨークまたはワシントンから江戸まで約三〇日、かかることとなる。この旅程の順序はまた氣候の点で、最も適当である。ヨーロッパでは多くの政府が冬季中、政務を執っており、異常な暑氣の季節は、この旅程の順序によれば避けられるからである。

備考四、特別な部門のために特定の委員を任命する利点は次の通りである。

- (1) 使節に随行する各員には特定の任務と特定の性質とが与えられているばかりでなく、また明確な目的と努力

の方針を指示されてあるから、各々は研究すべき分野と遂行すべき義務をはっきり知り得る。従つて明らかな調査目標がなくて、時間と努力を空費しなくてすむ。

(2) 特別な委員の第二の利点は、明らかな分業の利便が得られるので、使節一行全員が諸国で文物制度を手当たり次第に研究に従事するよりも、一定の人員で一定の時間をかけてやる方が遙かによく目的の達成がなされるのである。

(3) 第三の利点は次の通りである。すなわち一般的才幹を有する人物が使節に随行するけれども、特別な委員の任命は特定の専門分野における特殊な能力を有する人々を利用する機会を政府に与え、従つて国家が有する最上の人材を用い得るものである。

信教の自由に関する覚書

わたしが学識ある人々と会話して気付いたことは、こういう点です。すなわち、ヨーロッパ人のいう「信教の自由」と称することに關し、多少誤解があるように思われることです。ある人々は、信教の自由を、政府が公然と西欧の宗教を認容し、これを国民一般に奨励する必要があるかのように漠然と解しているようです。この言葉にはさうしたことは含まれていない。一般に諸国の政府はこのようなことをしていません。イギリスの憲法によれば、プロテスタント信徒のみが王位につくことに定められているけれども、これは決してイギリスの国王または女王がイギリス国内の他の宗教を非難したり、承認したりする理由とはならない。従つて完全な信教の自由が英国国民に与えられているのであります。

これについては条約にも、公文書にも書かれたり、語られたりする必要はありません。この件について必要なこ

とは、西欧の宗教に対する昔の残酷な布令は撤廃されており、国民が天皇に忠誠で、その国の法律に従い、隣人と平和に生活し、正直にその營業を営み、何ら公然たる犯罪、または不道德を行わない限り、国民はその信ずる宗教が、仏教であれ、儒教であれ、プロテスタントであれ、カトリシズム、その他いかなる宗教であっても、その信仰のために迫害されるべきでないことは国民も世界一般に知っています。宗教の自由は単に次のことを意味します。すなわち、一国の人民は自己の良心に従い、その宗教上の見解をもち、礼拝を行うことは許されている。もしその人が、宗教を信ずると否とを問わず、法律上の罪を犯した場合は、何らの差別なく、単にその人は犯罪者として罰せられるのであります。

上述の使節の委員のうち、宗教の部門については特別委員をあげませんでした。それをすべての方々に研究してもらいたいののでそのままにしておきました。一方において、普通の能力を有する者で欧米の生活を見たものは、たしかに西欧の宗教が罪惡を制し、または誘発するか、公私の道德を改善し、または害するか、また、日本国民の一人が、このような信仰を生活の規範として抱くことによって、善くなるか、悪くなるか、または仏教信者としてよりもキリスト信者として罪を犯すことがちであるか否か、を容易に判断し得るでありましょう。この点に全体の問題がかかっています。なぜなら、これが日本の僧侶たちの大いなる反駁論であり、その僧侶の多くはすべての外国の宗教は国民を腐敗と墮落にひき入れるものだと考えているからです。

それ故、宗教の自由を与えることの可否について決定することは、主として、次の問題に帰結します。はたして、これらの教理がある人々の想像するような有害な影響を及ぼしたことがあるか、または今後あり得るだろうか、否むしろ、そういうことはあり得ないだろう、このことは良識ある研究者ならば容易にたしかめ得るところであります。

他方において、天皇は仏教の僧職を委員としてヨーロッパに派遣するよう任命することはありえない。しかしながら、もっと熟考した上で、位の高い、かつ仏教諸派の良識ある僧侶たちの幾人かを、他の委員に加えれば、もつとよい結果が得られるだろうと思います。

重要事項（N・B）同じ原則で、もし極端な保守派（攘夷家）の指導者が使節一行の理事官等に加われれば、多少よい結果が得られるでしょう。それは使節を外国に派遣する企画にその党派を和解させるからです。そうでないと保守派は猜疑と嫌悪をもって見るからです。このようにすれば、自由派、保守派、僧侶階級のすべてが立案された使節派遣に対し和解し、積極的な関心を抱くでしょう。

一八六九年六月一日 大隈に送った書状

一八七一年一〇月二九日 訂正

G・F・フルベッキ

右を詳細に検討していくことは近代史家にゆだねるが、はやく大隈に素案、草案ともいふべきものを渡していたこと、それが大隈のもとに——当時の国内事情を考えて——眠っていたこと、岩倉具視によって公になることなどが判明する。大隈自身の記述するところともほぼ一致する。大隈もよき機会をみて公にしようとする腹づもりはあったと思う。おそらく、教育のみでなく、政治、外交、文化、学術など多くの分野にわたり、フルベッキほど外国人として日本の中枢にはいりこみ、その言動が信任されて、実施にふされたものは希有といつてよからう。明治六年一二月、開成学校を退任する折、文部少輔正五位田中不二麿の名で、政府は「貴下東京開成学校在職中、注意懇到、今日学事諸般ノ端緒ニ就クモノ其功不尠、実ニ感謝ノ至ニ候……」と感謝を示し、さらに、明治十年十一月には、元老院を退くにあたつて、明治天皇に謁見しつぎの勅語をたまわっている。

汝 朕カ政府ノ為ニ緊要ノ事務ヲ賛ル茲二年アリ 其芳鮮カラス 今や期満テ既ニ其約ヲ解ク朕太タ其効ヲ嘉ミス
まさに、フルベッキの書簡の解題で、杉井六郎氏がへその関係した分野はきわめて広汎であり、ほとんど維新政府
の新施策の源泉、陰の主役者と称してよいと評価しているとおりである。

さて、俗にへブリーフ・スケッチ (Brief Sketch) といわれる外国へ使節団を派遣すべしとするフルベッキの右の
草案については多くの研究があり、久米邦武『米欧回覧実記』とも内容的にふかきかわるところがあるので、こ
では論じないが、派遣にあたってブリーフ・スケッチが基本になっていることはすべての研究者のみとめるところ
である。史家はフルベッキの草案はへ大隈使節団計画へになるはずが、へ岩倉使節団へにきりかえられたと考察して
いる。非薩長閥の排除にもつながったわけである。その後の日本の政治路線がどうなっていたか、近代史が証明して
いる。それにしても右に引用したブリーフ・スケッチの内容は一読して、すばらしい提案であると思う。国内的な雑
音の中の日本人にはこれだけの案を具体的に構想することはできなかったと思うほど、冷静に客観的に日本の国際的
地位の確立への案を示している。へ最初ヨーロッパを訪ね……という草案とは逆になった訪問順序の経路ではある
が。さらに、宗教上の点はほとんど受け入れずへ良識ある僧侶への派遣はなかった。また、へ極端な保守派 (攘夷派)
の指導者へも加えなかった (保守派とは薩長出身とか旧幕臣ということではない)。むしろこれを留守役においていたこ
とが、のちの国内の政変をひきおこすことにもなったのであろう。

明治四年の欧米使節派遣にあつて、大隈がフルベッキの草案をその時点ですら手中に秘して公約にしなかったこと
は、国内事情を憂慮した大隈の考えがあつたといわれる。政府高官の暗殺、旧幕藩の浮浪化した徒、農民一揆、新政
府自体の内部矛盾——外国派遣は時期尚早と考える大隈の思慮もあやまりではあるまい。まして一八六九年の時点
はとうてい実現不可能であつたともいえる。

フルベッキは公職から去って明治十一年アメリカに帰り、再び翌年来日しているが、以後、華族学校や東京一致神学校で教え、本来の宣教師にもどっている。しかし明治一四年（一八八二）の手紙に、へわたしの以前の学生たちが、わたしに再び政治学の講義を毎月二回してくれるように望みました……政治学の学生に、わたしの講義の増加を要求させたものは、主として次の如き理由からだたと信じています。極く最近天皇陛下は明治二三年（一八九〇年）に帝國議會の開設と憲法發布のあることを布告されました。そして貴族（大小の大名）の間には、その時には貴族院のようなものが創設せられるだろうという期待があります……こうした考え方と大きな関係があったものと思われまふ」と書いている。フルベッキははまだ日本の政治と無縁にはなれなかったのである。そしてさらにつぎのようになる。

わたしの政治学の二人の学生で、長崎時代の大隈と副島とは、早くから帝國の顯要な地位、すなわち大臣と参議になつており、それ以後の生徒たちも今や政府部内の内務省や外務省の中で、種々と重要な地位についております。このことから、ある階級の人々の間には、一定の期間、わたしの授業を受けることによって、政府の地位につくことが出来るし、あるいは昇進へつながることは極めて確實であるというような漠然とした考えが生まれました。わたしはよくこのようなことを聞かされたし、またそれはちよつと立派にみえたし人ぎきもよいのです。時と場所によつては、役人たちの心を多少なりとも一般的にキリスト教をうけいれるように勧めることもでき、少なくともキリスト教に対して好意をもたせる効果はありました。しかし神の祝福によつて、わたしは相当長い年月の犠牲と労苦によつて、既に相当効果をあげています。そして今や、この国（日本）はこんなに解放され、かつ前進してきておるのですからこの線に沿つて更によい効果をあげることは、わたしの知る限りでは、極めて小さいのです。わたしたちの仕事は時代とともに変化しなければなりません。ある人々は、わたしが彼等に講義をするのを断ることによつて失望するかもしれませんが、むしろより多くの人にとってはこんな漠然たる望みはなくなることがより望ま

しいのです。

右は日本人への絶縁状ともいうべく、フルベッキが真に日本人に尊敬された理由がわかるような気がする。彼が教育した大隈重信にも、その崇高な精神は必ずや学ばれて血となり肉となったことと思う。「若い日本」と呼ばれる連中の間に絶大な追隨者をもつ福沢諭吉について「これまで日本にキリスト教を導入することに反対しておりましたが、最近はずっと今までの考えを変えてしまったのです。一種の日和見主義となり」（明治一七年七月十日付手紙）と批判している。これも確かなフルベッキの眼だと思う。

フルベッキの年譜を作成すれば、明治一二年以降講演や信州上田・小諸への伝道、明治学院神学部での講義——島崎藤村『桜の実の熟する時』に登場——など、本来の伝道に全力を傾けている。とりわけ信州各地の伝道が目立つようである。

明治三十一年三月十日、自宅で死去、棺は近衛儀仗兵の行列に守られて青山墓地に埋葬された。

(4)

近代の演出者
沼津学校

近代教育のうえから逸することのできないのは幕府の設立した、B開成所、D医学所、H昌平校、さらにF海軍所、G陸軍所——それらの行方と明治維新との関係である。いうまでもなく、新政府にとって新しい時代に多くの逸材が速成できるはずはない。その点、それまで、(1)～(6)までみてきたように、明治維新以前の幕府や各藩の開明的な姿勢が「近代の基礎」づくりとして、高く評価される場所である。

近代の演出者の一人、木村摂津守喜毅は、先にあげたごとく、長崎海軍伝習所の総監督として活躍、また万延元年（一八六〇）の日米修好条約書交換のため米国に派遣された新見豊前守ら使節の護衛として随行の咸臨丸に軍艦奉行と

して乗船、さらに、開成所頭取など表舞台にあって、日本の近代を動かした人物である。しかし、明治維新後は隠退してしまった。

將軍侍医とし、わずか廿一歳で奥医師となった桂川甫周(国興)——奥医師は禄高は高くないが、公卿に準じる高い地位で参議などに匹敵するという——も西洋医学所の教授とし、かつて日本近代医学の担手として活躍したわけだが、維新後は隠退し、浅草に繕生薬室という薬局をひらいて、民間社会での医事衛生の普及に従事した。維新後、旧幕臣は必ずしも十分に才能や経験が活用されたわけではない。弟の藤沢次謙(主税)は講武所砲術教授方仕役から同所頭取となり、顯職を歴任、慶応四年には陸軍副總裁(若年寄格)となつて、總裁の勝海舟とともに幕府の支柱として活躍した。しかし維新後は將軍慶喜にしたがつて沼津に移つた。静岡學問所、沼津兵学校(兩者合せて仮に「静岡学校」とよぶ)に所を得たが、茶の栽培などに失敗、やがて新政府に仕えることとなる。しかしその活躍ぶりはほとんどしられていない。

あるいは柳河春三のように、語学の天才といわれ、蘭、英、仏、独の諸語をあやつり、慶応四年には開成所頭取となつたが、維新後は、一時、新政府に仕えたものの明治三年に三九歳で夭折した。志を果たさなかつたのである。その点、開成所翻訳方の前島密のように明治維新後、新政府で近代的郵便制度の建設に活躍、大隈重信との親交をもつて志を得た一人といえよう。箕作秋坪(菊池秋坪)のように、開成所教授、箕作阮甫の養嗣子となり、彼自身も開成所教授として活躍、維新後も、政府派遣の使節団に随行したり教育博物館、図書館長などとなつてそれなりの才能を発揮した。その子、菊池大麓は幕末慶応二年(一八六六)に幕府派遣の英国伝習生として、中村正直、川路太郎、外山正一(捨八)、林董と留学、菊池はさらに維新後も、明治三年(一八七〇)、新政府の留学生としてケンブリッジ大学で数学を研究、帰国後、東京大学に職を得、やがて東大総長、文部大臣などを歴任、日本近代高等教育制度の樹立と改革

に活躍した。大正六年、理化学研究所の初代所長に就任している。しかしこれは新政府にあつても所を得た一例である。

文久二年（一八六二）、幕府による和蘭派遣伝習生の一人、西周助は洋書調所教授手伝並であつたが、漢学から洋学さらに英学に転じた蘭学者である。しかし明治維新後、明治二年（一八六九）に沼津兵学校の校長となつた。あるいは中村正直（敬宇）のように、幕臣として昌平校に学んで、その教授となり、さらに上述のように幕府派遣の英国留学をし、西と同じく沼津兵学校で教授として教鞭をとつた。しかし彼もまた、新政府によつて召還された。その他医学所の三代目頭取、松本良順（蘭疇）、また和蘭留学の榎本武揚なども一時はいわゆる賊軍の汚名を得るも、それぞれ新時代に活躍する場を得た。その知識と技術は新政府のめんめんには欠けて求められず、彼等の協力なしには、新政府は近代国家の樹立も発展も不可能だったのである。文化、学術は徳川の遺産を引継ぎ、次の世代の出現をまたねばならなかったのである。ここで徳川家が静岡に引移つて、建設した二つの学校について、すこしく考察しておこう。いわば洋学の終焉である。

静岡に移つた徳川氏の学問機関は幕府時代の開成所と昌平校、さらに海軍所、陸軍所の延長であつた。それが静岡学問所（別に静岡学校、駿府学校の通称もある）と（沼津兵学校）（沼津学校、海軍学校の通称もある）の設立となつた。以下、二校を総称して、（静岡学校）とよぶ。いうまでもなく、人的資源をそれら旧幕の人びとにおうという意味である。前者は、（御国学、漢学、洋学御開始相成候には、有志之者は身分之貴賤に限らず出席いたし候様可致候……）とあつて、明治元年十月に講義を開始した。後者は同年十二月である。

静岡学問所は向山隼人正が頭取であるが、教授に津田真道、中村正直、杉享二、東条礼蔵、外山正一など江戸の開成所のスタッフや留学した俊才がそのままつわっている。さらに多数の教、職員がいた。次の世代ともいふべき旧幕

臣子弟はここで学んで、新時代で活躍したものも多くいるわけである。バランスのとれた学習講義内容かと思うが、語学にフランス語、英語のいずれかを必須として学習させた（特にフランス語を重んじた）。

沼津兵学校は校長を西周（周助）に、同じく開成所、昌平校のスタッフ、旧御目付で新政府で権大参事となる服部左仲、少参事、藤原長太郎（謙）、同阿部邦之助（潜）、同江原鑄三郎（素六）、権少参事、矢田堀景藏（鴻）など、和蘭伝習生や長崎の海軍伝習所で腕を磨いた人々が設立メンバーとなった。これに予備小学校と病院（軍医養成）を付属とした（やがて、陸軍病院に吸収される）。具体的な教授スタッフは、赤松大三郎（則良）、田辺太一、渡部一郎（温）、乙骨太郎、杉享二（静岡学問所と兼任）、永持明德、高島四郎平、中根淑、蘭鑑三郎、山田昌邦、永峰秀樹などである。長崎海軍伝習所や和蘭留学、開成所のスタッフだったものが中心である。外国語はやはり英語と仏語であるが、前者には渡部温、乙骨太郎、高島四郎平、蘭鑑三郎であり、フランス語は山内勝明、永持明德、石橋好一、黒田久孝である。幕末、開成所のスタッフそのままといつてよい。参考までに講義科目をあげてみよう。いずれも近代を志向しての重い構想である。

◇学科…

外国語…英・仏語の会話・文典

万国地理、窮理、天文の概略、万国史、経済説大略

数学…点竄（代数学）・開平開立・二次方程式・連数対数ノ理／幾何：平面式、八線正斜三角、立体／実地測量／器

械学／図画／乗馬／統砲打力／操練

砲兵将校科と築造将校科には前者の「数学」として、〈高等点竄・高等幾何・微分積分・静学・流体静学・動学〉が設けられ、ほかに「器械学・化学」などが加わる。後者は前者とほぼ同じであるが、〈水理学〉として「道路・橋水道・

造船学」などがある。

以上のように、そして歴史家の多くが指摘するように、新政府のもたつきもあるが、いちはやくきわめて近代的な学校がここに設立されたといつてよからう。スタッフをみても類推することができるように、幕府がそれまでにいわば、三百年の蓄積であるヨーロッパの文化・学芸・教育を受けて、わがものとするべく研究し理解した成果による。すでに考察したように、幕末の外国語や教育機関が近代ヨーロッパの制度やカリキュラムを摂取しており、近代的な「学校」を設立することは時間の問題であった。ここは国際性に配慮して、人間教育に徹し、よき人材を教育するためのものであった。附属の小学校とともに、ここに学んだ人びとが、新しい日本社会で活躍したという事実によつて証明されることにならう。しかも原則に反して、諸国からここに遊学するものも多かったのである。しかし明治五年五月、兵学校は政府の命により解散するを余儀なくされた。洋学の發展的解消である。

静岡学問所の学生と関連して、新政府のお雇外国人の方式もまた旧幕教育体制の引つぎであることを証しておきたい。この静岡学問所にアメリカ人、E・W・クラーク Clark が招聘された。クラークは英・仏両語を用いて理化学を講義し、通訳に下條なる青年があたつた(下條は二四歳の若さで死去)。へ自分が今までに教える特権を許された学生中、彼等は最も明敏な人達で、かやうな学生を教えるのは大なる楽しみであるとのべている。クラークはバイブルクラスをつくつて、自宅で講義、中村正直などは熱心な会員の一人だったという。この点、先にふれたフルベッキや長崎海軍伝習所のオランダ人教育班のスタッフたちと同じ感想評言といえよう。しかし彼もまた明治六年、新政府の招請により化学の教師として開成学校で教えることとなり、静岡を去った。

このように、旧幕の教育、文化の実質的継承は、新政府の文教政策や人的配置の中に生かされていた。たゞ先にふれたように、人により個人による浮沈があり、適応の是非もあつて、必ずしも、その実力が十分に新時代に生かさ

れた人たちとのみはいえない。たとえば、長崎海軍伝習所で勝海舟などと行動をとみにし、海軍総裁にまでのぼり、沼津兵学校の教授となった矢田堀景蔵（鴻）などは、明治になって『華英学芸詞林』などを訳編して、英学の方で地道な学究生活に落着く。新政府に仕えるものの必ずしも志をとげることができなかった逸材の一人である。ついに官職にはつきえなかったのである。^{*9)}

旧幕時代の済美館とフルベッキ、長崎海軍伝習所とオランダ人海軍将校のように、また静岡学問所とクラークのように、明治新政府による「お雇外国人」の制度も、その本源はやはり幕府の積極的な外国人（アメリカ・オランダ・イギリスなど）招請が一つの出発点であった。ただ、旧幕時代と異なり、オランダ→ドイツ・イギリス・アメリカなどと協力の外国人が異なることで、当然、内容的、質的にも変化をもたらしることとなるのである。

長崎が近代の発信地であるが、同時に旧幕府が幕末の十余年間に懸命に設立した諸教育機関、とりわけ外国語教育や海外視察、伝習生派遣、お雇外国人などに重点をおいての近代への志向は、まさしくやはり「近代の演出者」が幕府であったことを実証すると思う（前稿の「幕末の外国語教育と長崎」の図表を参照）。

さて、明治三年九月、新政府は沼津兵学校の校長である西周に、「今度依召東京に罷越候儀大儀に候、入念に相勤可申候也」と藩主、徳川家達の名での命令書をもってするわけである。兵部省出仕少丞として西は学制取調御用係に徴令されたのである。新政府にとって、諸般の改正や設定は急務でありながら、人材払底のため、旧幕臣にたよらざるを得ず、西に白羽の矢が立った。つづいて、兵学校の教授、さらに学問所の有力なスタッフもつぎつぎと新政府出仕を命じられ、静岡は急速に落日の時を迎えることとなる（明治四年、静岡学校は新政府の兵部省所管となる）。やはり旧幕臣は敗者であり、国家のためという大義名分の前には、新政府に協力、出仕せざるをえなかったのである。

なおここで附属小学校について一言つけ加えておく。これは小学校の名であるが、範を欧米の大学予科にとつたも

ので、いわば大学予備門であつた。沼津兵学校、静岡学問所をいわば大学とするとそこへ入るための準備校という性格の学校であつた。学科に体操、乗馬、水練などもあり、寄宿舎を設け、きびしい教育を施した。町方の有志も「通稽古御免」であつたから、入学志望者はきわめて多かつたという。明治五年九月までは存在し、これまた多くの逸材を世におくりだした（周知のように、明治五年学制令が發布され、学校の構造や進む方向が確立される）。この有力なスタッフに江原素六がいる。一般には現、東京の麻布高等学校の前身、麻布中学校の創立者、校長として知られているが、江戸生まれで昌平校で学び、講武所に入り、幕末は官軍と戦い一時はやはり賊臣の汚名をえたが、維新後、静岡へ移り、附属小学校の教授スタッフとなつたわけである。しかし、その豊かな教養と学殖は新政府の命で明治四年、アメリカに教育制度視察に出かけている。江原の帰国したころより静岡学問所も沼津兵学校も、そして附属小学校も衰退の一途をたどるのみで、江原は一時、附属小学校の残留生徒などとともに「集成舎」という学舎をおくすが、結局明治八年（一八七五）、新制度の静岡県師範学校長、沼津中学校長などを歴任——その間、洗礼を受けてクリスチャンとなる——、明治二年（一八九六）に自己独自の教育観をもって、麻布中学校を創立した。これより先、明治三年（一八九〇）、衆議院議員として政治方面にも活躍、政友会に重きをなした。旧幕臣の、そして静岡学校の有力スタッフの生きざまの一例である。なお谷崎潤一郎の『文章読本』に彼が東京府立一中（現、日比谷高等学校）在学中、卒業式の来賓として麻布中学校長、江原素六の演説があり、歯切れのいい江戸弁であつたことを紹介している。

以上、静岡学校を寸描してみたが、徳川が三百年の平和を保って、文化、学芸、とりわけ蘭学が出発点にあつて、幕藩体制の補強的役割をもつたはずであつた。しかし時代の経緯、施政者、個人の物の考え方に質的变化があり、幕末には幕府や原則と離れて、外国や外国人から与えられる世界観や技芸思想を学んで自己改造にもつなげていったのである。

さて、幕末の外国語学習、翻訳などの教育機関に人的資源を供給したのはいうまでもなく、私塾である。具体的にいえば、杉田玄白を鼻祖とする杉田家の天真樓である。とくに分家ながら、玄白―立卿とつづき、さらにその子、杉田成卿はもつとも優秀な人材であり、最高の洋学者として、蕃書調所の教授として、洋学、翻訳の点から幕府の近代化に尽力した。本家筋の杉田玄端もまた徳川家とともに静岡に移ったが、兵学校の附属病院にあって、その頭取として他の医師たち十数人とともに活躍した。ここには、林洞海や坪井信良、戸塚文海など、江戸洋学の名門の末流名医がスタッフとしており、獣医、製薬方、薬園掛、調剤掛などをようして、やがて沼津病院や静岡病院へと引つがれる医学・医術の基礎を樹立した。いうまでもなく、江戸の医学所はやがて大学東校―東京大学医学部となっていく点と、根源は一つのものである。近代医学が長崎に発していることとともに、旧幕時代の蘭方医の存在の大なることはかわりない。玄白門の大槻玄沢は芝蘭堂を受けついで多くの逸材を育成したが、自己の系統は子の玄幹でむしろ絶えた。代つてその門に修業した宇田川玄真や橋本宗吉、稲村三伯などによって、洋学は全国的に全盛にむかったわけである。とりわけ、風雲堂主人こと宇田川玄真は、門弟に坪井信道や緒方洪庵、杉田成卿、箕作阮甫、広瀬元恭などが出現、さらにその門弟たちが各地に広がっていくわけである。そうした私塾によつてはじめて幕末の秀逸な洋学者が数多く養成され、中には開成所のメンバーとしても活躍する。あるいは諸藩の藩校へと人材をおくりとどけることとなった。もちろんこれに加えて、幕府の機関、蕃書調所でも広く人材の養成に努力したわけである。

さらに、私塾、とりわけ緒方洪庵の適塾は大坂を根拠地として、多くの優秀な人材を養成し、中には明治維新後、国家、社会で活躍の人物を輩出している。洪庵は自からも、幕府当局の要請をこばみえず、二代目の医学所頭取として江戸で活躍、現代東京大学医学部の基礎を構築することに尽力したというわけである。その教育、門弟養成法は多くの研究者が考察しているとおりである。適塾での緒方の三蔵と俗称された村田蔵六（大村益次郎）、伊藤慎蔵、緒方郁

蔵が出、あるいは福沢諭吉のような新時代の啓蒙思想家などが養成されたわけである。私見では洪庵こそ幕末最大の教育者と評することができると思う。この適塾の俊才の一人、長与専斎なども長崎での医学所で修業ののち、明治維新後、広運館の責任者ともなっている。また赤十字社の創設者である佐野常民なども同様である。さらに箕作阮甫も杉田成卿ともども蕃書調所の教授として活躍したが、その一家一門、子孫は明治維新後にも新政府に仕え、文教方面で有力な人材をおくり出したことになる（四一ページも参照）。

こうして江戸の蘭学は私塾に発して、大坂、京都、名古屋とそれぞれ一中心的役割をもつて、多くの有能な洋学者を養成し、かつ世のため人のために活躍したのである。私見では文化八年（一八一）の和蘭書籍和解御用（翻訳局）の設立で、蘭学が公的になった大切な時と考える。もちろん、その後も私塾の存在は大であった。洪庵において、長崎遊学が大きな刺激となり、その世界観や思想に影響を与えたように、あるいはまた勝海舟の長崎修業のように、長崎の存在は大であった。やはり、開幕より幕末まで、約三百年の間、全国からここに遊学する蘭方医や文化人、知識人、さらに幕府機関の学者、役人、開成所などのスタッフたちに絶えずヨーロッパの文化、学芸を供給したのは長崎蘭通詞であった。彼らは一つには幕末、鎖国の扉をたたいた外国と外国人との通訳として活躍したが、またヨーロッパの文化、学芸の翻訳、さらには医学や理化学、さらに英学の学習先駆者として日ごろ研鑽の成果をいかんなく発揮して、ここに集う学究の徒のよき仲介者としても活躍したわけである。中には堀達之助、何礼之助（礼之）など、開成所の教授に抜擢されたものもいるのである。さらに、明治維新後、長崎から横浜に蘭通詞および長崎での英学学習者が移り住んで、新開地の横浜で活躍する。ここが新たに近代の発信地となった。この点については、別稿「横浜の英学」を留意した。つぎの機に公表したい。

このように、近代のヨーロッパ学の根源を根本において支えたものは、とりもなおさず、長崎という場所であり、さらに個々の人間とその活動を容易たらしめた江戸という時代精神であり、施政者の英知であったと思う。

註

(1) 英語を学習した蘭通詞は夭折したものも多い。たとえば、西吉兵衛は安政元年、森山栄之助は明治四年、榎林栄七郎は万延元年、中山兵馬(六左衛門)は天保二年(一八三一)、志筑辰一郎は安政四年などである。なお、嘉永四年(一八五一)入津のヨアン(Jaen)号の船長、C・T・ファン・A・de・ローン(Coningh)は、彼が二名の長崎通詞——うち一名は森山という——に英語を教えたと記述している。ここにも通詞の自発的学習態度がうかがえると思う。ペリー来航にさながらそなえていたことである。

(2) 日蘭学会編『幕末和蘭留学関係史料集成』(雄松堂書店)を参照。

(3) 幕府が時の商館長、D・クルチウスに近代的风風海軍を創設したい旨を伝え、オランダ政府の協力と軍艦建造を依頼した。カットンディーク『長崎海軍伝習所の日々』(水田信利。訳平凡社・東洋文庫26)を参照。

(4) 『江戸のオランダ医』(三省堂選書)の著者、石田純郎はポンペが当時のオランダのウトレヒト陸軍軍医学校の長所を基本的に取り入れたものであったといひ、ヘオランダの大学医学部、クリニカルスクールの科目名とは質的に異なる」とし、へその軍医学校のシステムの性格は、そのまま現在の大学にまで温存された。すなわち現在の日本の医大には、医学とは何かを知るための医学哲学、医学史、医学概

論などの研究室がないという大変奇妙な状態となっている」と指摘する。しかし私見では拙著で証明することく、この点はカリキュラムや研究室の有無ではないと思われる。あるいは『医戒』の出版にみられることく、実質的には西欧医学思想、哲学を撰取することもそれなりにおこなわれ、ヨーロッパの医学思想や医の倫理を十分に体得して新時代にも流れていったと思う。単に技術的、実践的軍医医術に終始して日本人医師が満足したのではない。現代のそれはむしろ明治以降の医学教育のシステムや人的要素にあると思うが、どうであろう。

(5) 註(4)の『江戸のオランダ医』によれば、ポンペ以降来日したオランダ医は十四名、うち九名は軍医学校に勤めたボーディンの教え子で、他もボーディンと何らかのつながりのあるボーディン人脈の医師という。さらに石田氏はオランダ系医学校が東京では衰弱したものの、地方では大正期まで生きのこり、日本の医育機関の地方におけるセンターになるとのべている。

(6) 谷口中秋著『藍田遺稿』収載、へ藍田谷口先生伝を参照。同書の一部につきのようにみえる。

慶応元年十二月「ウルヤムス」入門「ウルヤムス」は「フルベッキ」の同国人なり。此時大隈八太郎(今の伯爵)長崎に在り英語を「フルベッキ」に数学を「ウルヤムス」に受く、一日先生(藍田)大浦に到り書を「ウルヤムス」の家に講

ず。適大隈亦至る。因て相携へて其僑居に帰り快談数刻此れ先生大隈と相知るの始なり。

晩年、藍田は早稲田大学でも講義しているが、フルベッキ―大隈重信―藍田の間には明治維新以降も強い親交の糸が張られている。さらにへ先生の訃音を発するや久邇宮鳩彦王殿下稔彦王殿下車を自宅に枉げ尸に礼せらるゝとあつて、宮家とも親交を重ねた。

(7)拙著『西洋人の日本語発見』（創拓社）を参照。

(8)『大隈伯昔日譚』（早稲田大学出版部）、高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』（新教出版社）によつて、フルベッキと大隈との緊密な交友が判明する。以下の引用も両書による。

(9)杉本・呉共著『英華学芸詞林の研究』（早稲田大学出版部）を参照。

◇参考文献…古賀十二郎『徳川時代に於ける長崎の英語研究』（九州書房）、杉本つとむ『日本英語文化史の研究』（八坂書房）、米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』（三省堂）

（すぎもと つとむ 文学部教授）

◆幕末洋学関係年表

嘉永六年

六月

ペリー浦賀に来航。

一八五三

七月

ブチャーチン長崎に来航。

十一月

水戸藩西洋式軍艦の建造を始める（江戸石川島）。

安政三年

二月

洋学所を蕃書調所と改称す。

四月

築地に講武所を開く。

嘉永七年

一月

※ジョン万次郎、江戸に召される。
ペリー再来。堀達之助・本木昌造・森山栄之助（多吉郎）ら通訳。
日米和親条約を締結。

三月

オランダ艦シンビン号が長崎入港。艦長ファビュス、英軍艦長崎に来る。

七月

ブチャーチンのディアナ号大坂港に出現。ついで伊豆へうつり、十一月に下田の津波でディアナ号大破。

安政元年

九月

日魯和親条約を下田で締結。
※薩摩藩、造船所を築く。加賀藩、壮猶館で西洋学を講習。

一八五四

十二月

天文方と蘭書籍和解御用を独立して、洋学所とし、古賀謹一郎を頭取とする。
※桂川甫周『和蘭字彙』刊行（安政五年に完了）。

△十一月改元

安政二年

三月

ブチャーチン、新造船で帰途につく。

安政四年

二月

矢田堀景蔵ら観光丸で江戸に帰府。

四月

講武所内に軍艦教授所をつくる予定。

八月

カッテンディーケの指揮するヤーパン号（咸臨丸）、長崎着（第二次長崎伝習）

十月

長崎製鉄所起工／米公使ハリス来日、下田協約（日米約定）締結。森山多吉

六月

和蘭の軍艦シンビン号（観光丸）、ゲデ

ー号が長崎に入津。

十月

第一次長崎海軍伝習の教官、ベルスライケンが来崎、矢田堀景蔵（鴻）・勝海舟、伝習生となる。

洋学所を蕃書調所と改称す。

築地に講武所を開く。

八月

和蘭軍医、ポンペ来日。松本良順伝習する／イギリス東洋艦隊司令長官ミーマア、軍艦ウインチェスター号で長崎入津。

十月

ロシア使節ボシエツト、下田来航。

十二月

目付木村喜毅が長崎在勤を命じられる。
※大野藩、蘭学館を設立／長門藩、大船建造／仙台藩、造船所を松島につくる（長崎で伝習の工人、三浦乾也という）／佐嘉藩、蘭学寮を設立。

二月

矢田堀景蔵ら観光丸で江戸に帰府。

四月

講武所内に軍艦教授所をつくる予定。

八月

カッテンディーケの指揮するヤーパン号（咸臨丸）、長崎着（第二次長崎伝習）

十月

長崎製鉄所起工／米公使ハリス来日、下田協約（日米約定）締結。森山多吉

十二月

矢田堀景蔵ら観光丸で江戸に帰府。

二月

講武所内に軍艦教授所をつくる予定。

四月

カッテンディーケの指揮するヤーパン号（咸臨丸）、長崎着（第二次長崎伝習）

八月

長崎製鉄所起工／米公使ハリス来日、下田協約（日米約定）締結。森山多吉

十月

長崎製鉄所起工／米公使ハリス来日、下田協約（日米約定）締結。森山多吉

十二月

矢田堀景蔵ら観光丸で江戸に帰府。

二月

講武所内に軍艦教授所をつくる予定。

四月

カッテンディーケの指揮するヤーパン号（咸臨丸）、長崎着（第二次長崎伝習）

八月

長崎製鉄所起工／米公使ハリス来日、下田協約（日米約定）締結。森山多吉

十月

長崎製鉄所起工／米公使ハリス来日、下田協約（日米約定）締結。森山多吉

十二月

矢田堀景蔵ら観光丸で江戸に帰府。

安政五年

一八五八

郎通弁。

※長崎奉行所にて鉛活字による横文諸

書印刷。

※長崎・神奈川・函館開港。

伊東玄朴ら江戸の蘭方医ら六十余名が
お玉ヶ池に種痘所開設。

六月

日米修好通商条約調印／蘭・魯・英国
と修好通商条約に調印／九月、仏国と
修好通商条約に調印。

七月

伊東玄朴・戸塚静海ら奥医師となる。

幕府、長崎奉行に英語伝習所を設立さ
せる（のち、英語所・洋学所・済美館
と改称）／幕府、外国奉行をおく。

※安政の大獄はじまる。

十二月

矢田堀景藏、長崎より咸臨丸で帰府。
通詞、福地源一郎随行。

※長崎にコレラ発生、江戸に及ぶ。

一月

勝海舟、軍艦操練所教授方頭取に任命
される。

二月

軍艦奉行を新設し、永井尚志が就任。

五月

駐日イギリス総領事オールコック着任。
アメリカ宣教師、J・リギンス、C・
M・ウィリアムズ長崎に来る。

安政六年

安政七年

△三月改元

六月 木村喜毅帰府。九月に軍艦奉行並、十

一月に軍艦奉行となる。

七月 シーボルト再び来日。

九月 フランス人宣教師ジラルル、通詞を兼

ねて江戸仏総領事館に入る。

十月 カッテンディーケ、長崎を離れる（ボ
ンペは残留）／アメリカ宣教師ヘボン、

神奈川に来る。

十一月

アメリカ宣教師S・R・ブラウン、シ
モンズ、神奈川に来る／同G・H・F
・フルベッキは長崎に来る。

※函館初代ロシア総領事、ゴシケーウ

ツチ、および領事館付医師アルビレ
ヒト函館赴任。

同月 仏人、メルメ函館に仮聖堂を設け、医

療と語学を教える。

※ロシアの函館領事館内にギリシヤ正
教会を設け、マーホフを在任させる。

咸臨丸で品川出帆。遣米使節、新見正

興らポーハタン号で出帆。軍艦奉行、

木村喜毅、軍艦操練所教授、艦長勝海

舟ら咸臨丸で護衛、五月に帰国。

井伊大老暗殺（桜田門外の変）。

三月

万延元年

一八六〇

六月 勝海舟、蕃書調所頭取に任命される。

七月 蕃書調所、市川斎宮、加藤弘藏（のち弘之）、ドイツ語を学ぶ。

九月 蕃書調所に精煉方設置（のち、化学科と改称）／幕臣の子弟に西洋語学習を奨励し、蕃書調所への入学を布達。蕃書調所内に英学句読を設ける。

十月 私立、種痘館を幕府直轄とし、種痘所と改称。初代は大槻俊斎（二代目、緒方洪庵、三代目、松本良順である）

△万延二年二月改元
文久元年 ※幕府、諸藩士の軍艦操練所入学許可。

魯船ボサドニツク、対馬に來航。

四月 龜田丸、箱館を出帆してロシア領に向かう。

十一月 種痘館を西洋医学所と改称。大槻俊斎頭取／遣欧使節、竹内保徳一行、品川出帆。

七月 蕃書調所にフランス学科設置。林正十郎・小林鼎輔、教授手伝となる／箱館、ロシア領事館付司祭として、ニコライ来る。

九月 長崎に医学所と養生所設立。ポンペを指導者として、松本良順など学ぶ／幕

府横浜に英学所と漢学所（修文館）を設立。

一月 ※ヘボン、宗興寺に施療所を開設。幕府、「官板バタビヤ新聞」（官板海外新聞）発行。

四月 坂下門外の変。二月に遣欧使節帰国。横浜で英画家ワグマン、「ザ・ジャパン・ポンチ」発行。

七月 海舟、軍艦操練所頭取、翌月、軍艦奉行並に任命される。

八月 A・サトウ・スタック、横浜到着。生麦事件がおこる。

九月 緒方洪庵、江戸に下り、奥医師、西洋医学所頭取となる。英船ジンキー（順動丸）購入。

十月 蘭軍医、ボードウィン來崎。

十一月 幕府最初の遣蘭伝習生、榎本武揚、西周助ら長崎出帆。

※仏人宣教師ブレイジアン、長崎で活躍。

※開成所教授、堀達之助を主任とする『英和对訳袖珍辞書』を刊行。

二月 ヘボン、居留地に移り、診療所、英学

塾をかねる。

三月 幕府、学制改革。小学校設立の計画を
ねる。

六月 下関事件おこる。伊藤博文ら萩藩士五
名、ひそかに英国留学。

七月 英仏守備兵、横浜駐留。

※ブラウン、英学所で教える。七月、
緒方洪庵没。八月、箕作阮甫没。

十月 洋書調所を開成所と改称。

△文久四年二月改元

元治元年

一八六四

六月 神戸に海軍操練所をおき、勝海舟が頭
取となる。

八月 開成所、学則を欧米の学校にならう。

九月 四か国連合艦隊、下関で交戦。

※村上英俊『仏語明要』を刊／官板『博
物新編』(訓点)刊。

元治二年

二月 浜田彦蔵「海外新聞」創刊。

三月 フランス公使、ロッシュが着任。

慶応元年
△四月改元

四月 鹿児島藩士、五代友厚・寺島宗則(松
本弘安)ら、ひそかに英国留学／長
崎、養生所を精得館と改称。附属に医
学所をおく。

五月 軍事調査のため、外国奉行、柴田剛中

らの仏国派遣を命じる。

六月 遣魯伝習生、市川文吉ら函館より出帆。
横浜で The Japan Times 発刊。

七月 長崎、精得館内に分析究理所(物理・
化学教授所)を設立。長崎洋学所を済
美館と改称。

※柳河春三ら会訳社を組織し、横浜で
発行の英字新聞を翻訳、回覧する。

※英貿易商、グラバ、長崎市内で模
型

汽車を運転。

※ブラウン、バラ、タムソンら横浜運

上所の一室で日本人のための
英学所を開く(二カ年でやむ)。
ヨハマアカデミ

※十月、幕府建設の横浜製鉄所竣工。

十一月、同じく横須賀製鉄所、仏人
ウェルニーにより起工式はじまる

(明治四年に第一期完成)。

三月 フルベッキ、佐賀(嘉)藩、致遠館教
師に就任。

五月 蘭人、ハ(ガ)ラタマ来日。八月、マ
ンスフェルト着任／英公使、パークス
横浜着任。

八月 軍艦操練所を海軍所と改称。十二月、

講武館を陸軍所と改称。

十二月 幕府、遣英伝習生、中村正直（敬宇）ら出帆。

※ブラウン、自宅で英学所の学生に聖書を教える／江戸に西洋料理店開く。

△慶応四年九月改元
明治元年
一八六八

※幕府が学術修業や貿易のため、海外渡航を許可する。

五月 江戸城開城。
七月 新政府、徳川家達を駿河府中に封ず。
八月 新政府、旧医学所、昌平坂学問所、開成所を復興／大坂に含密局開く。

慶応三年

一月 水戸藩主弟、徳川昭武、パリ万国博参加のため横浜出帆。箕作麟祥随行。

一八六七

二月 福沢諭吉『西洋事情』刊／開成所で西洋地理学、窮理学（物理学）、兵学、歴史学など、公開講義をひらく旨通達／幕府、英・仏語学の伝習のため、横浜に語学所を設置。

九月 江戸を東京とする。
十月 榎本武揚、五稜郭、箱館に布陣。
十一月 長崎の精得館を長崎府医学校と改称。長与専斎、学頭とす。

十二月 箕作麟祥、学校取調御用係に就任。

三月 幕府がオランダに注文の開陽丸、横浜に到着。矢田堀景蔵乗組む。

※柳河春三、神田孝平、加藤弘之、福沢諭吉など洋学者の新政府出仕を命じる（神田孝平のみ応じる）。

五月 蘭人、ハラタマ開成所に着任。物理・化学を教える。

七月 陸軍所で仏軍人による伝習、海軍所で英軍人による航海術伝習のため、希望者を募集／榎本武揚、軍艦頭取並。沢太郎左衛門が軍艦役並に任命される。

十月 將軍、慶喜、大政奉還上表提出／英